



* 0055382000 *

0055382-000

390.4-T045ウ

宣戦の大詔

蘇峰徳富猪一郎・著

東京日日新聞社, 大阪毎日新聞社

昭和17

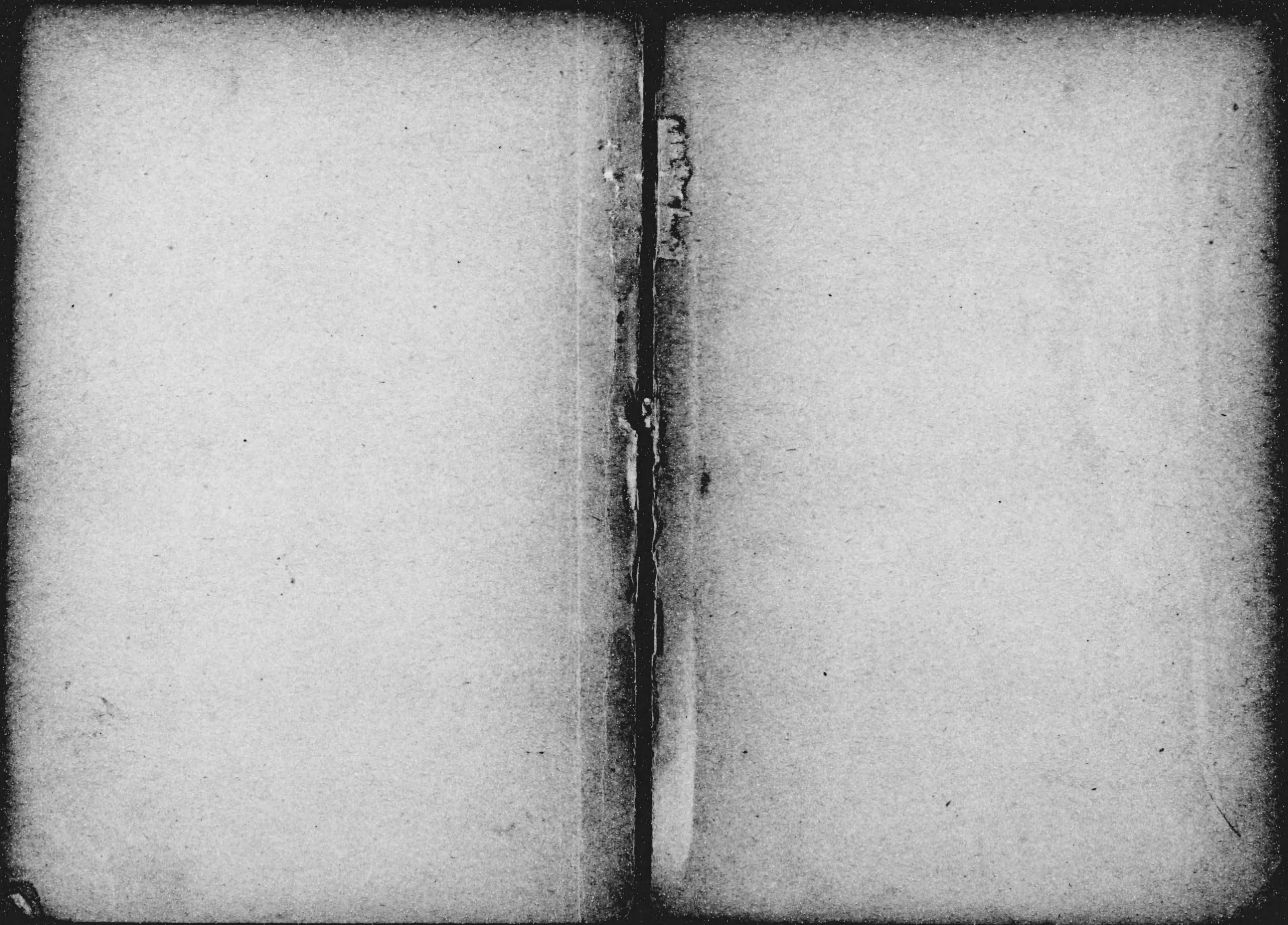
AJA

390.4
To.45
ウ

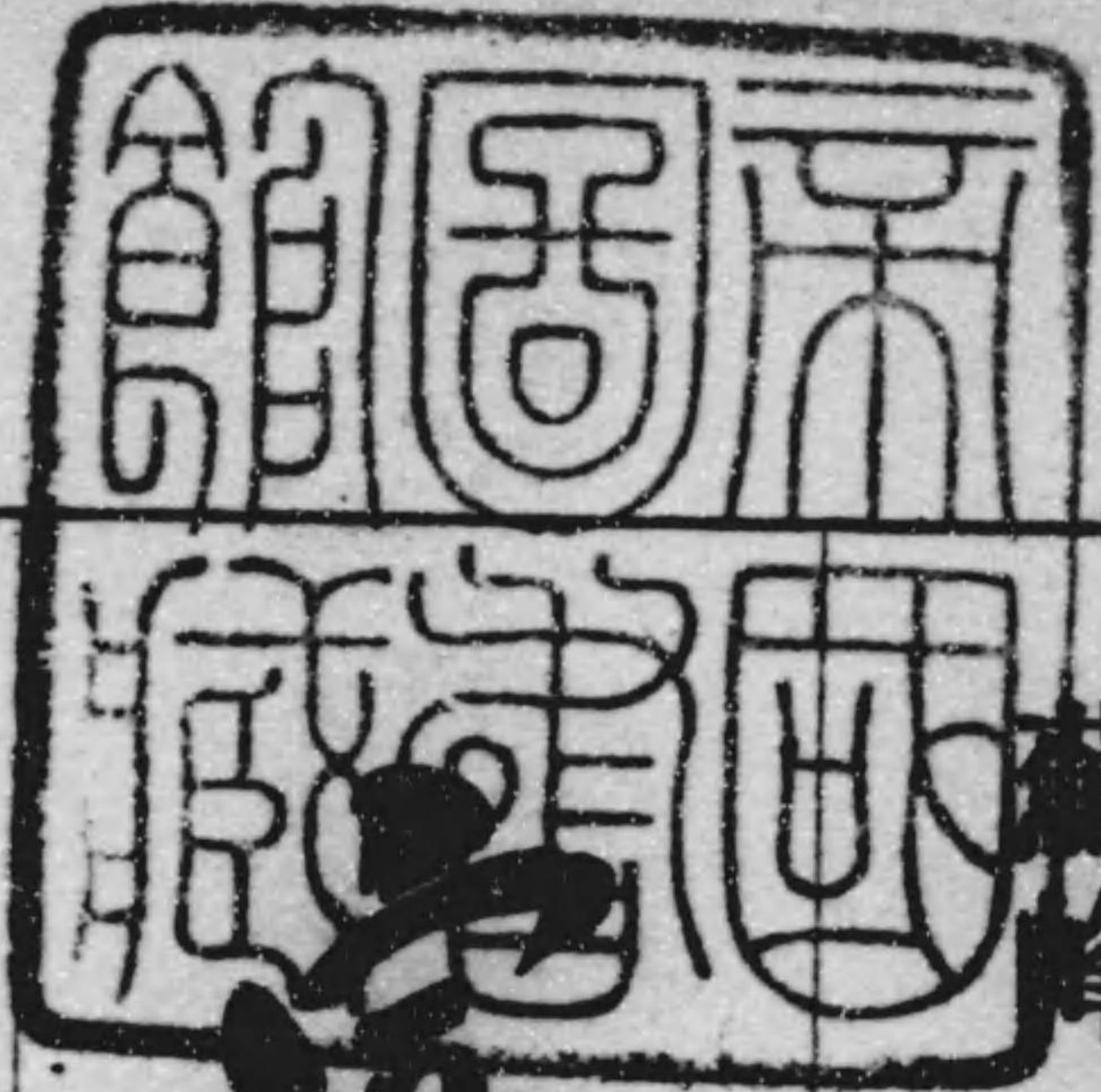
蘇峰 徳富猪一郎謹解

72
宣戰の大詔

東京日日新聞社
大徳日日新聞社



390.4
Po.45
④



蘇峰

徳富猪一郎謹解

道戰の大詔



東京日日新聞社
大阪毎日新聞社

E931
111

對米英宣戰の大詔

詔書

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ 昭ニ忠誠勇武ナル汝有
朕ニ示ス
朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戦ニ從事シ朕カ
百僚有司ハ職ヲ奉行シ朕カ庶民各々其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力
ヲ舉ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ
抑々東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ至願ナル皇祖考丕承ナル皇
考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ拳々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦
共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナリ今ヤ不幸ニシテ
米英兩國ト覺端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ中華
民國政府曩ニ帝國ノ真意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪亂シ遂ニ帝國ヲ
シテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經タリ幸ニ國民政府更新スルアリ帝
國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提攜スルニ至レルモ重慶ニ殘存スル政權ハ米英ノ庇蔭
ヲ恃ミテ兄弟尙未タ睦ニ相聞クヲ懷メス米英兩國ハ殘存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍

亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス 利ハ與國ヲ誘
ヒ帝國ノ周邊ニ於テ武備ヲ增強シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和的通商ニ有ラユル
妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシ
テ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメムトシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ交譲ノ精
神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ益々經濟上軍事上ノ脅威ヲ
増大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝
國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル
帝國ハ今ヤ自存自衛ノ爲嗚然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ
皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有眾ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速
ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名御璽

昭和十六年十二月八日

各大臣副署

序

昭和十六年十二月八日、米英に對する宣戰大詔の渙發は、我が一億の國民に於いて、天の岩戸の開かれたる如き心地を來した。世界の歴史も之が爲に一轉し、我等皇民の心境も亦た之が爲に一新す。洵に振古未曾有の大盛事である。

予は之を捧讀の餘、感激自ら揣らず、之が述義を作らんと考へた。偶ま一月十四日、大毎、東日幹部の諸君と會合した。談之に及ぶ。曰く「我社茲に謹解を作り、之を天下に宣揚し、敢へて奉公の赤誠を表せんと欲す。冀くは先生を勞せん」と。

予曰く「文義を訓解し、章句を註疏するは、予が能くするところに非ず。然も藤田東湖先生が「講道館記述義」を編したる如く、其の大本に遡り、其の大義を述ぶるに至つては、身四朝の聖澤に浴し、見聞する所亦少からず。敢て之を試みん」と。

斯くて同日の午後より稿を起し、二十七日に至つて、全く之を脱するを得

た。今ま校正を一讀するに、意餘り有つて言足らざるものあり。理足りて、事關くるものあり。讀者幸に著者の目的の存する所を諒として、紙外に之を看取せよ。

昭和十七年二月八日

大詔奉戴日

熱海樂閑莊に於て

蘇峰八十蒙叟

目次

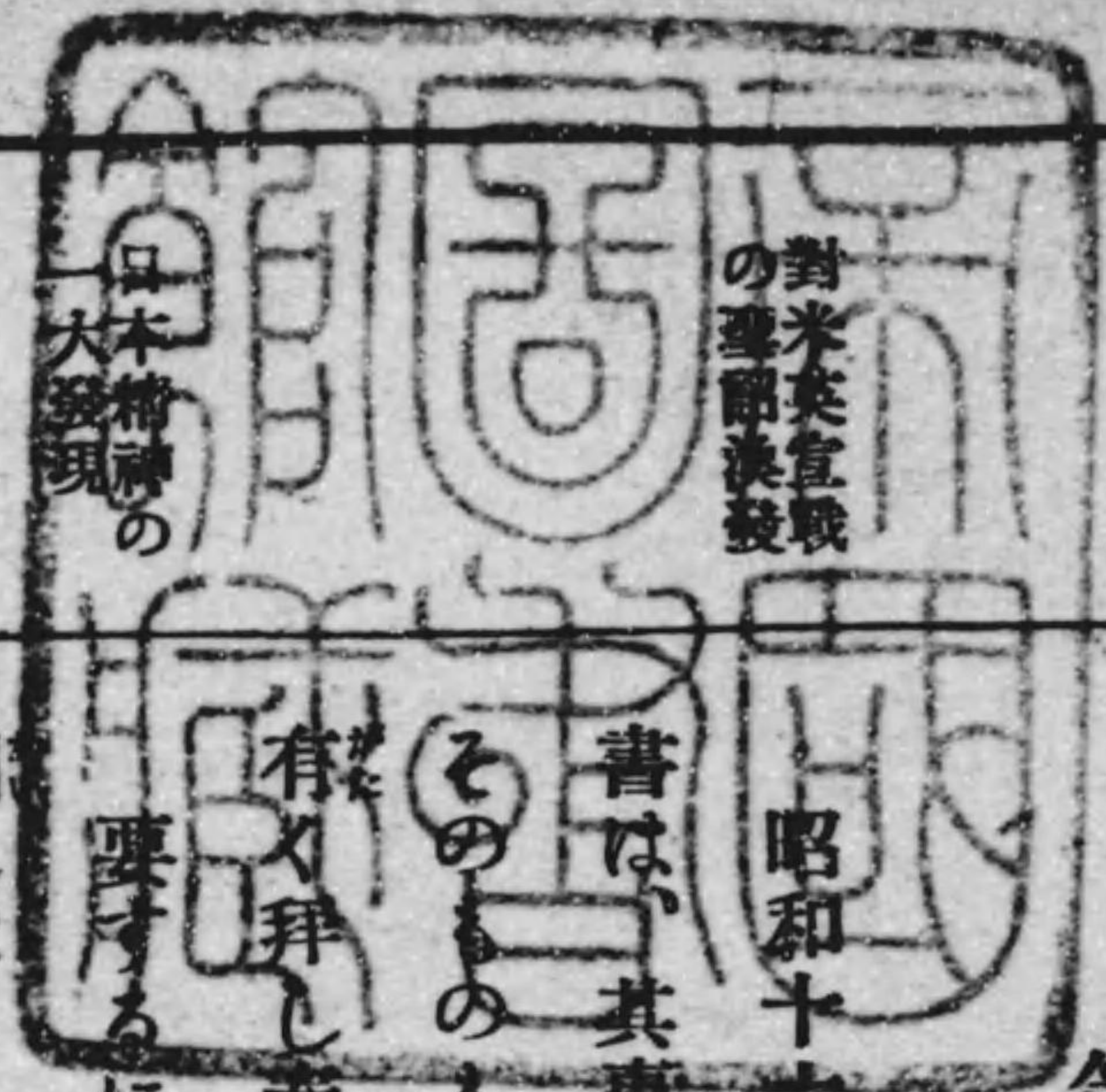
一	米英膺懲と歴史的必然	一
二	皇國と皇民への自覺	三
三	世界無比の國體と皇道	五
四	皇道の本源	九
五	日本の國性たる包容	一三
六	有史以前の日本と祖先	一九
七	「神代紀」と皇謨の廣大	二四
八	日本國家の特殊性	二七

九	日本の忠孝と支那の忠孝	三
十	忠孝一本の日本	三
十一	忠孝と儒教	四〇
十二	明治維新と尊皇攘夷	四〇
十三	日本の攘夷と正當防禦	四九
十四	皇政維新と皇政復古	五三
十五	尊皇攘夷と條約改正問題	五三
十六	尊皇攘夷の意外なる到着點	六〇
十七	實力解決の條約改正	六二
十八	有史以來の日本と朝鮮	六五
十九	争地としての朝鮮	六六
二十	明治政府と朝鮮問題(一) 木戸孝允の主張	七〇

二十一	明治政府と朝鮮問題(二) 西郷南洲の達見	七四
二十二	日本歴史と世界の光たる日本	七六
二十三	日本の完全獨立と朝鮮	八三
二十四	隣國支那の歐米依存	八六
二十五	日本と露英米三國	八九
二十六	豊太閤と圖南の大志	九二
二十七	幕末に於ける露國と英國	九六
二十八	東亞に於ける英國の惡辣	一〇〇
二十九	日清戦争と英國	一〇三
三十	日清戦役後の親英論と親露論	一〇八
三十一	日英提携策と獨逸(一)	一一三
三十二	日英提携策と獨逸(二)	一二七

三十三	日英同盟と予の觀察……………	三〇
三十四	日英同盟より日露開戦へ……………	二四
三十五	日本の發展と天佑……………	二八
三十六	日露戦役と英國の所得……………	三三
三十七	幕末に於ける米國……………	三五
三十八	米國の東洋進出……………	三九
三十九	獨逸皇帝とルーズヴェルト……………	四二
四十	米國の排日と東亞への魔手……………	四五
四十一	世界大戰と日本の骨折り損……………	四九
四十二	日英同盟の廢棄と四國條約……………	五三
四十三	華府會議とロンドン會議……………	五七
四十四	國際聯盟脫退及び歴史的因果律……………	六一

四十五	日本を賣つた英國の應報……………	六一
四十六	米國の横暴と大東亞戰爭の應報……………	七〇
四十七	大東亞戰爭と米英の徹底的驅逐……………	七四
四十八	大東亞の指導者としての三條件……………	七八
四十九	日本魂を養へ……………	八二
五十	忠良なる皇民を作れ……………	八五
附錄	註釋……………	八九



第一 米英膺懲と歴史的必然

昭和十六年十二月八日漢發せられたる、米英に對する宣戰の御詔書は、其事が三千年來の我が國史に其例無きばかりでなく、御詔書そのものも亦寔に歴代御列聖の御詔書中、比類稀なる一として、難有り拜し奉る。

要するに此の事件は、我が皇國の歴史に、一大躍進の新時代を打開したると同時に、三千年來の歴史の中に養ひ來りたる日本精神の一大發現である。

現御神の治
め給ふ國

皇國に住む
臣は是皇民

世界獨特の
我が國體

神とは我が皇祖皇宗及び現在の今上天皇を申し奉る。神が治め給ふと云ふは、我等が天皇を現御神として、崇め奉るからである。此の如く我國は、世界古今に比類無き、特別なる國にして、神國であり、神國即ち皇國である。其の現御神たる天皇に依つて治めらるゝ皇國に住める我等は、即ち皇民である。

従つて日本は其の長き歴史の丁場に於いては、世界の凡有る國と其の形迹を同じくするが如き事もあり、従つて比較研究の必要もある。併し其の根本に至つては、全く別種のものであつて、世界人類の歴史の中に於いて、全く他に類例無く、又他と比較す可からざる獨特の國柄である事を知らねばならぬ。此の獨特の國柄を、我等は日本の國體といふ。

萬世一系の
天皇
(御詔書)
天佑ヲ保
シ萬世ヲ
ノシ皇祚
メル大日
帶天武
昭ニ忠誠
武ナル汝
倫理的國
家

第三 世界無比の國體と皇道

此の國體に就いて、今一、二の要綱を擧ぐれば、日本は萬世一系の天皇に依つて統治せらるゝ國である。日本は天祖天孫の肇め給ひし國である。日本は皇室が本幹となつて、國民はそれより分岐し、若しくはそれに附隨し來れるものである。

日本は世界に全く比無き倫理的國家にして、天皇と皇民との關係は、義は乃ち君臣、情は父子である。此を以つて日本は家族的國家であり、同時に國家的家族である。

日本の凡有る領土は、悉く天皇に屬するものにして、我が皇民

は天皇に對し奉りては、如何なる場合でも、絶対服従す可きものである。

日本の今日に於いては、憲法を以つて信仰の自由を保障せられ、國體に害無き宗教は、皇民の自由に信仰するを保障せられてゐる。然も凡有る宗教に超越して、日本國民は所謂る皇道を標準とし、皇道を実踐せねばならぬ。

皇道とは天皇の示し給ふ道にして、即ち皇民の行ふ可き道である。その道は三種の神器に依つて示されたる道にして、これに就いては北畠親房卿は、左の如く言明してゐる。

又三種の神寶を授けまします。まづあらかじめ皇孫に勅して宜は

く、葦原千五百秋之瑞穂國、是吾子孫可王之地也、宜爾皇孫就而治焉、行矣、寶祚之隆、當與天壤無窮者矣。又大神御手に寶鏡をもちたまひ、皇孫に授けて祝きて、吾兒視此寶鏡、當猶視吾、可與同床共殿、以爲齋鏡、とのたまふ。八坂瓊の曲玉、天の叢雲の劍を加へて三種とす。又この鏡の如くに分明なるをもちて、天下に照臨したまへ、八坂瓊のひろがれるが如く、曲妙を以て天下をしらしめせ、神劍を提げて不順ものを平らげ給へと勅ましくけるとぞ。此國の神靈として、皇統一種正しくまします事、誠に是等の勅に見えたり。三種の神器世に傳ふ事、日月星の天にあるにおなじ。鏡は日の體也、玉は月の精也、劍は星の氣也、深き習ひあるべきにや。

鏡の意義

玉と劍の意義

鏡を本とす

抑彼寶鏡は、先にしるし侍る石凝姥命の作り給へりし八咫の御鏡、
八咫に口玉は八坂瓊の曲玉、玉屋命天明玉といふ。作り給へる也。八坂にも口傳あり。
劍は素戔嗚尊の得給ひて、大神に奉られし叢雲の劍なり。

此三種につきたる神勅は、まさしく國をたもちますべき道なるべし。鏡は一物をたくはへず、私の心なくして、萬象を照すに、是非善惡の姿あらはれずと云ふ事なし。その姿にしたがひて感應するを徳とす。是正直の本源也。玉は柔和善順を徳とす。慈悲の本源也。劍は剛利決斷を徳とす。智慧の本源也。此の三徳を翕あはせ受けずしては、天下の治まらん事誠に難かるべし。神勅明かにして、詞約つづまかに、むね廣し。剩へ神器にあらはし給へり。いと々かたじけ忝なき事にや。中にも鏡を本とし、宗廟の正體しやうたいと仰がれ給ふ。鏡は

智仁勇の三徳

明をかたちとせり。心性明かなれば、慈悲決斷は其中にあり。又正しく御影をうつし給ひしかば、深き御心を留め給ひけんかし。天にある物日月より明かなるはなし。仍りて文字を制するにも、日月を合せて明とすといへり。

第四 皇道の本源

鏡を以つて正直の徳を現はし、玉を以つて慈悲の徳を現はし、劍を以つて智慧の徳を現はす。寔に親房卿の解釋は、其の要領を得てゐるものだ。或は又た鏡は一切を照らす智慧を表はし、玉は一切を受け容るゝ仁を表はし、劍は正邪曲直を判断する勇を表はす、所

我が皇道の
本源

謂る智仁勇の三徳に倣らへても差支あるまい。
何れにしても我が皇道の本源は誠にあり、正直にあり、公平にあり、包容の大にして、容れざる所無きにあり、悪を除き、邪を拂ひ、正義断然敢へて冒さず、敢へて冒されざる所にあり。歴代御列聖の御聖徳は、皆な一として此の三徳に基かざるものは無い。即ちこれが日本の國性であり、同時に又た國民性でもある。これを總稱して我が皇道とは云ふ。

智仁勇の三徳などと云へば、如何にも月並的の倫理學說に類するも、これを具體的に語れば、我國に於いては、所謂神武不殺、如何なる場合に於いても、武力の爲に、武力を弄ぶことは無い。

武力の爲に
す武力を弄ば

降魔の劍

我國に所謂
攘夷無し

我が國家が武力を用ゆる際には、所謂降魔の劍を揮ふものにして、一切の邪惡を退治し、一切の正善を實行せんが爲である。而して我國に於いては、肇國以來、一視同仁、未だ曾つて他の民族に對して故らに差別待遇を爲したる事は無い。若し強ひて差別待遇を爲したといふ事あれば、それは寧ろ異民族であつた爲に、之を優遇し、之を厚待したのである。固より我國に於いても、攘夷なるものがあつた。併し他國の所謂攘夷とは、單に異民族たる故に、異民族を排斥するの謂にして、支那の歴史に於ける、周邊の諸民族に對するが如き。又た英米諸國が黄色人種、若しくは黒色人種に對する如く、他民族たる故に、之を排斥し、之を迫害し、甚しきは之を放逐する如きことあるも、我國に於いては未だ曾つて其例が無い。

降魔の劍を揮ふ場合

但だ其の民族が來つて、我が國內の治安を妨害し、我が國土の平和を攪亂し、我が國家と人民とに禍害を及ぼす際には、斷然立つて之を斥攘し、之を討伐する事を怠らない。

元寇、蝦夷、熊襲の例

例へば元寇の役の如きがそれである。又た東北に於ける蝦夷の蜂起、西南に於ける熊襲の叛亂の如きに對して、之を討伐したるが如きが、それである。但だ我國に於いては、蝦夷なるが爲に未だ曾つて蝦夷を討伐したる事が無い。熊襲なるが爲に未だ曾つて熊襲を討伐したる事が無い。蒙古人なるが爲に未だ曾つて蒙古人を斥攘したる事が無い。白哲人たるが爲に未だ曾つて白哲人を斥攘したる事は無い。

已むを得ざる討伐

彼等が討伐せられ、斥攘せらるゝには、彼等自ら求めて然らざるを得ざるに至つたものである。即ち今回の米英に對する御詔書に、
洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ
と仰せられたのは此事である。

第五 日本の國性たる包容

惟ふに我國の歴史は、國土の自ら名付くる如く、或は大和の國と云ひ、或は浦安の國と云ひ、或は細戈千足國と云ひ、何れも平和と武勇とを徵象する如く、其名の在る所に其の國性が現はれてゐる。若し萬一我が皇道の一視同仁に狎れて、我が皇威を冒瀆し奉らん

平和と武勇の歴史

皇國本來の國性

皇徳の廣大
無邊

とする如き者あらば、何物をも措いて、直ちに之を討伐し、之をして其罪を悟り、其正に歸せしむる事は、皇國本來の國性である。若しそれ我が皇徳を慕ひ、我が皇徳に服し、それに獎勵し、それに心服する者あらば、悉く收めて以つて大御實の中に加へ、日本國民たる大家族の一人に加入せしむる事は、肇國以來の事實として、未だ曾つてそれに違ふ例が無い。

我が國性の
包容

我が國性は排斥ではなく、包容である。包容の及ぶ所、「日本書紀」の「神武天皇紀」に於いて、明らかに示し給へるが如し。即ち東征の當初に於ける御言葉に、
天業を恢弘し、天下に光宅するに足るべし。

神武天皇の
皇徳

と仰せられたる如く。又た東征の業既に成つて、橿原に都を奠め給ふに際し、

上は則ち乾靈國を授くるの徳に答へ、下は則ち皇孫正を養ふの心を弘め、然る後、六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇となさむこと亦可ならずや。

と仰せられたるが如き、皆な巍々蕩々たる我が皇徳の廣大無邊なるを現はすものである。

祝詞の記事

我國の古典として、我等が最も大切にする祝詞の中にも能く其の意味が表はれてゐる。例へば、「東文忌寸部獻三横刀一時呪」に、
謹請 皇天上帝 三極大君 日月星辰 八方諸神 司命司籍。

ひたりはとうわうのよ。みぎはせいわうのほい。ごほうごてい。しじしき。捧以銀人一
左東王父。右西王母。五方五帝。四時四氣。捧以銀人一
請除禍災一捧以金刀一請延帝祚一。呪曰。東至
扶桑一西至虞淵一南至炎光一北至弱水一。千城百國。精
治。萬歲萬歲萬歲。

とある。

以上の文句には道教的臭味蔽ひ難きものあるも、之を以つて徒ら
に荒唐無稽と考へるは、大なる曲事である。これ皆な我が皇道の本
體の一端を、文字を以つて表はしたるものとして、我等は深く
之を玩味せねばならぬ。

X

X

X

崇神天皇の御詔書にも、

*お
惟んみるに、我が皇祖諸天皇等、宸極に光臨したまひしは、豈
に一身の爲ならむや。蓋し人神を司牧して、天下を経綸めたまふ
所以なり。故に能く世玄功を聞き、時に至徳を流かれたり。今、
朕大運を奉承し、黎元を愛育す。いかにして當に皇祖の跡に聿
遵し、永く窮りなき。祚を保つべき。それ群卿、百僚、爾の忠
貞を竭し、ともに天下を安んせむこと、亦可ならずや。
と仰せられてゐる。

是等は何れも我等が拳々服膺す可きものにして、即ち如上の詔書
が明治に至つては五箇條の御誓文となり、又た同時に出でたる『萬
里の波濤を拓開し、國威を四方に宣布し、天下を富岳の安きに置か
むことを欲す』の御宸翰に出で來つたものである。

故に人類を子とし、四海を宇とするの我が皇謨は、肇國以來三千年の歴史を一貫して、今日までに至りたるものにして、茲に我が皇國の歴史の特殊性は見出さるゝ。

或は又た「我が高祖神、高皇產靈尊の所謂る高皇產靈といふ言葉に因みて、我が國體は即ち産びにかゝつてゐる。産びとは創造する事、結合する事、即ちそのむすぶの道が、皇道である。」といふ者もある。

これも要するに我等が前に掲げたる意味を、異つたる言葉を以て説明したるものにして、別に何等異同のある可き筈は無い。即ち日本國は國そのものとして、無敵國である。何故なれば、他の民族を

決して敵視してゐない。日本には本來敵は無い。唯だ日本國に敵する者が已むを得ず日本國の敵たるのみである。

第六 有史以前の日本と祖先

我等は姑らく眼を轉じて、有史以前の日本に溯つて考へて見度い。予の専門に研究したるは、近世日本史にして、有史以前の日本に就いては、唯だ常識以外、何等知識の持合せが無い。されど常識を以て考察するに、有史以前の日本、即ち我等の祖先の行動したる地域は、正に恰も現在の我等が行動しつゝある地域と、全く同じとは云はぬが、殆んど同じきものゝ如く思はるゝ。

群を爲して
移動

の人はそれ等のものが無い爲に、鶏犬の聲は聴きつゝ隣村にも往來せぬ者もあらうと思ふが、それは大なる間違ひである。昔の人は今の人よりも脚が達者である。又た時間の觀念に就いても、今日の人如く性急では無かつた。然も本能的に其の生活の必要よりして、群を爲し、移動しつゝあつた事は、今日の人到底想像する事が出来ぬ程のものがある。

奈良朝文化
と地中海沿岸の文化

例へばペルシヤ邊で見出さるゝ紋様の陶器が、支那の河南の地からも掘出され、更に滿洲の一部からも掘出されてゐる。畏れながら我が正倉院の御物中には、唐の文化は愚か、イラン、アラビヤ、エジプト、ギリシヤの文化さへも想像され、暗示せらるゝものがある。

奈良朝と印度の交通

つて、即ち我が奈良朝の文化には唐の文化ばかりでなく、ニール河畔、若しくは地中海沿岸の文化さへも及んでゐる。

世界人類を
包容

斯る譯合であるから、我國に移住したる者は、必らずしも近き朝鮮とか、若しくは福建とかいふばかりでなく、随分遠方から來た者のあつた事は、勿論であつて、我が奈良朝の時にも林邑や、印度から來りたる者のあつた事は、國史に明記せられてゐる通りである。されば日本は我が巍々蕩々たる皇徳の下に、殆んど世界人類の展覽會と云ふ可き程に種々の人種が來り集つたものであると想像する事も、決して無稽の妄説ではあるまい。

皇徳に依る
大和民族の
生成

然るに何故にそれ等の異分子の痕跡を留めず、渾然たる一種の大

和民族化したるかと言へば、それは我等の君にして父に在ます天皇が、其の廣大無邊の皇徳を以つて、恰も太陽が其熱と光とを以つて總てのものを融かし、總てのものを煦め、總てのものを發育せしむるが如く、遂に民族の本幹であり、中樞である我が皇室に依つて、大和民族に生成せられたものと見るが、適當なる解釋であらう。

第七 『神代紀』と皇謨の廣大

『神代紀』を見れば、素戔嗚尊の如きは、幾度か日本海を横斷して朝鮮と往來し給うたことが判る。
『神代紀』を見れば、龍宮の話もある。又鰐の事が屢々出てゐる。學者の中には鰐は鮫の事であつて、所謂鰐では無いといふ説もあ

るが、寧ろ鰐は鰐として受取つた方が適當ではあるまいかと思ふ。何故なれば其長さ幾尺といふ事が書いてあるからには、鮫と見るよりも、鰐と見る方が適當ではあるまい乎。
又天磐船とか、或は檣樟船とか、杉船とか、船舶に関する記事も少く無い。されば我等の祖先は、船舶に乗つて、我が大八洲の周邊は愚か、其の外邊にも往來したであらうといふ事が察せらるゝ。
垂仁天皇の御宇に田道間守が、常世の國に赴いて、橋を求めたといふことがあるが、常世の國といふは何處であるか分明では無いが、兎に角、南方であることは間違ひあるまい。
何れにしても今日の琉球人は、尙ほ眇たる丸木船にて、遠洋漁業にジャワ、スマトラの邊に出掛けてゐることであれば、我等の祖先

黒潮と貿易風

がその通りのことをしないと、誰が斷言する事が出来よう。

然も我等には黒潮なる一の潮流があり、又た貿易風なる一の氣候風がある。此風と此潮とは、我が大八洲を世界に繋ぐ大なる道路でもあり、又大なる運送力でもあり、大なる交通機關でもあつた事は、今も古の如く、古も尙ほ今の如くであらうと思ふ。

されば今日の日本國民が、大陸に出掛けたり、大洋に出掛けたり、盛んに日本を中心として東西南北に活動しつゝあるのは、近頃が始まつたことではなく、つまり有史以前の我等の祖先の生活状態を、再び此に繰返してゐるものと見て差支あるまい。

我等は有史以前、我等の祖先の生活を想像する毎に、我が皇

祖先以來の活動

皇の廣大無邊は固有の眞面目

廣大無邊なることは、今日に始まりたる事ではなく、我國本來固有の眞面目であるといふ事に判斷するが、最も常識的の考へ方であると信ずる。

第八 日本國家の特殊性

茲に我等が心得て置く可き事は、日本は西洋流の權利義務を經緯としたる個人主義に依つて國を建てたるものでもなく、又た支那の如く家族を本位として國を建てたるものでも無い。西洋は個人が集つて國を成したるものであつて、其爲にルツソンの『民約論』なども出で來りたるものである。『民約論』はルツソニに始つた譯

西洋及び支那の建國

個人を本位とする西洋

でなく、其の以前ホッブス、ロツクなどといふ人々の議論もあつて、必らずしもそれが其の通りと正認する譯では無いが、然も斯る議論の出で來りたる根本は、歐米社會が個人を本位とし、個人の集合體が即ち國家を成すに至りたることを證す可き、有力なる證據と云つて差支あるまい。故に歐米では國家は滅び、家族は散亂しても、個人は依然として存してゐる。個人主義の國としては正に斯く有る可きものであらう。

家族を本位とする支那

支那は個人を以つて本位とせず、家族を以つて本位とする國である。故に支那では國家は常に革命を免かれず、歴史の上にも二十四朝の歴史が存在してゐるに拘らず、家族は昔ながらの家族である。支那が異人種より征服せられたるに拘らず、尙ほ依然として、その

皇室を戴く我が日本

支那たる所以を失はざるは、其の君主を變へたる迄にして、國家を成す所の要素である家族は、漢、唐、宋は申迄もなく、元の時代にせよ、明の時代にせよ、清の時代にせよ、皆な同一であるからである。

然るに我が日本は、個人主義の國でも無ければ、家族主義の國でも無い。日本では家族を大切にし、血統を重んずる事は、支那に比して毫も劣れるところは無い。けれども日本には更にそれよりも大なるものがある。それは皇室である。支那には家族はあるが、皇室は無い。日本には家族はあるが、更に其上に皇室がある。支那では家族が集つて國を成すが、日本では皇室が國土を統治し給うて、其の國土に皇民たる家族が繁殖してゐるものである。

日本國家の
獨自性

故に支那では家族があつて、而して後國家があるが、日本では國
家があつて、而して後家族がある。支那では國と家と何れを大切に
するかと云へば、如何なる時にも家を大切に、國は其次である。
西洋では身を大切に、家は其次、國は又た其次である。日本では
國を大切に、次に家を大切に、次に身を大切に、日本は西
洋とは全く其の順序を顛倒してゐる。

x

x

x

日本國は天
皇の治しめ
すところ

而して國といふ事も、支那や西洋の國とは、大いに意味を異にし
てゐる。日本では國は即ち我が天皇の治しめすところのものにし
て、日本人には君と國との差別は無い。君の外に國無く、國の外に
君無く、既に皇國と云へば、天皇の治しめすところの日本國民も皆

君と國とは
同一

皇室を外に
無して日本國

な其中に包容せらるゝものである。國家に奉仕するといふことは、
即ち天皇に奉仕する事である、我等一億の民衆は、一人たりとも、
決して天皇を國家の機關などと思つてゐるものではない。

西洋でも支那でも、其の君主が亡びても、其の國家は依然として
存してゐるが、日本では皇室あつての日本國で、皇室を外にして日
本國なるものを想像する事さへも、我等に於いては出来ない。これ
が即ち日本の世界に比類無き國體の國體たる所以である。

第九 日本の忠孝と支那の忠孝

日本國民と
忠孝

それで日本國民の道義は、忠孝に存する事は、支那も日本も相違

支那は孝を
第一とす

會國藩の
一

が無い。明治天皇の下し給へる教育勅語にも、

爾臣民克ク忠ニ克ク孝ニ

と仰せられてゐる通りである。併し日本國民の忠孝に對する觀念と、支那人の忠孝に對する觀念とは、之を歴史的に見、之を事實的に察しても、大なる相違がある。

支那では孝を先にして、忠が之に次いでゐる。家族本位の國家としては、斯くある可き筈であり、此くある可きが當然である。故に支那の道德では、忠孝兩全ならざる場合には、忠を捨て、孝に就く事を、當然の道としてゐる。井上梧陰先生（井上毅）も斯く記してゐる。

山東捻匪の起れる會國藩の力に依り、撲滅に歸せむとす。偶々會

孝が第一
は第二

支那は孝忠
日本は忠孝

の母逝けり。會三年の喪制に従ひ、郷里に歸る。捻匪猖獗を極め、彼の有名なる僧格林沁も戰敗れて死するに至れり。國の獨立に志あるものは、言論を待たずして、得失を判断するに容易なるべし。

會國藩ほどの人でも、母の喪に服する爲に、折角自ら統兵の責任に當りたる戰場より退いて、三年の喪に服する事になつたのを見れば、孝が第一で、忠が之に次ぐといふことは、支那に於いては争はれない道德法である。

これは同じ忠孝と云つても、支那では事實孝忠であり、日本では事實忠孝其通りである。日本では昔より如何なる場合でも我君に忠を效す事を以つて、最上の道義と心得てゐる。君に忠といふ事と、

忠君即ち愛國
忠君即ち愛國

日本固有の
思想と萬葉
の歌

忠と孝とは
同一

國に忠といふ事とは、日本人には決して分解は無い。忠君が即ち愛國であり、愛國が即ち忠君である。此の區別を附くる者の如きは、それこそ西洋感染の翻譯思想で、日本固有の思想では無い。

日本固有の思想は、萬葉の歌人が、

今日よりは顧みなくて大君の

醜の御盾と出で立つわれは

と詠つたところのものである。

日本では當初より國家を家族的國家と見做してゐるからして、少數の家族が集つて國家を成したので無く、國家そのものを一家族と見做してゐるからして、忠と孝とは全く同一物である。

第十 忠孝一本の日本

孝の極致は
忠

日本では『忠ならんと欲すれば、孝ならず、孝ならんと欲すれば、忠ならず』といふことは斷じて無い。例へば戰場に出でて親の死目に間に合はぬとしても、忠に缺くるところ無きのみならず、孝に缺くるところが無い。何故なれば、一家總て皆な君に向つて忠なる可きものであるからには、其の家族の一人が、戰場に出でて、君の爲に忠義を效しつゝある事は、假令、家に歸つて其父の看病を爲す事が出来ぬとしても、父としては勿論、其の總ての家族も、それが即ち孝の極致であるといふ事を、當然認識す可きである。

忠の極致が
孝

忠孝一本は
日本獨特

忠良、忠勇
なる臣民

同時に孝の最も大なる事は、君を家長として、其君に盡す事であるからして、忠の極致が孝の極致であり、孝の極致が忠の極致である。茲に不言の間に、忠孝一本の國性が發揮せられてゐる。

支那でも『忠臣を孝子の門に求む』などと云つて、忠孝一本の眞理を認めてはゐる様だが、然も事實に於いては、之を分離して考へてゐる。眞に忠孝一本は、唯だ我が日本國の所謂る日本精神に於いてのみ之を見る事が出来る。

即ち如何なる場合に於いても、君に忠といふ事が、親に孝なる所以である。此の如く我國の道德の最高點は、忠の一字に總括せらるる。されば『忠良なる臣民』とか、『忠勇なる臣民』とかいふ御言葉を、我等臣民に賜はりたる事はこれが爲である。忠良なる臣民とは、

忠義の標本

日本國民皆
な忠臣

素直に忠義を盡すところの臣民である。忠勇なる臣民とは、勇み進んで忠を盡すところの臣民である。

世間では忠義と云へば、或は和氣清磨やら、或は楠木正成やら、或は乃木大將やらを、其の標本として語つてゐる。何人を標本にしても我等には異存が無い。されど日本に於いて此等少數の人のみを忠義の士と思ふは、大なる間違ひである。歴史有つて以來、今日に至る迄、我が日本國民の中には、皆な此の忠義の心が深く、植付けられてゐる。

一口に云へば總てのものが皆な清磨であり、總てのものが皆な正成であり、總てのものが皆な乃木大將である。但だ其時と場合が違

木樵漁夫に
も忠義の心
溢る

米英人の誤

ひ、手腕、技倆、才能等に相違あるも、忠義の一點に於いては、國民皆な同一である。日本では、誰彼を忠義の士と云はんよりも、寧ろ總ての者を忠義の士と呼び、唯だ然らざる若干の除外例を云へば澤山である。斯く云へばとて、清麿や正成や乃木大將を推讃するに及ばぬと云ふではない。但だ忠義の士は此等の人々に限ると思ふ事は、間違ひであるといふことを、茲に明白に語つて置くのだ。

我等は清麿や正成や乃木大將の心を、奥山に炭を焼く木樵にも、深海に漁撈する漁夫にも、若しくは其日稼ぎの賃仕事をする寡婦にも、皆なこれを認めてゐる。茲に日本の日本たる所以があるのだ。

米英に對して宣戰の聖詔が渙發せらるゝ以前、米英は唯だ數字を

我國に於ける
敗北論者

並べて、日本與みし易しと見てゐたのである。若し日本に今申すが如き忠義の精神が無かつたとしたならば、彼等が日本を甘く見ても致方はあるまい。併し日本國民は如何なる場合でも、いざとなれば、天皇陛下の爲に、總てのものを捧ぐる。愈々となれば、喜んで一命をも捧ぐるといふ事は、彼等に於いて思ひ付く可き筈も無く、彼等が此の重大なる一要件を見落したのも、彼等としては、決して怪しむに足らない。

然るに我國の人さへも、アングロ・サクソン感染者の如きは、自ら此事を打忘れ、とても勝味は味方に無いと考へ、城下の盟の恥を曝すよりも、寧ろ初から彼等の言ふ儘に、長き物に巻かれろと云うた者さへあり、口に出さずとも、思ふた者は鮮く無かつた様だ。

我等が常に精神的國防と言ふたのは、斯心を存養し、斯心を磨き立て、斯心を惺々として旺盛ならしむる事を云ふのである。

第十一 忠孝と儒教

忠孝一本は我が皇國の建前である。然るに從來忠孝の事に就いては、大概儒教の領分の如く心得、儒教の見解を以つて之を解釋し、其爲に日本の忠孝も、全く支那の忠孝と同一視するに至つたことは、實を云へば寧ろ難有迷惑である。

忠孝の講釋は愈々細微に入つて却つて愈々面倒になり、其の本來の面目は全く失はれて、忠孝は何處にあるや、其の本體を失墜すること

に至らんとするの憾みさへあつた。元來孝を本體とし、それに忠を附屬せしめたる支那流の解釋を以つて、我が國體の特絶なる日本に當て嵌めたのであるから、其の解釋の無理にして、實際に即せざることは、當然の事と云はねばならぬ。

日本では忠孝一本であり、君臣の上から云へば忠であり、父子の上から云へば孝である。而して所謂我が皇民の本來の職分は、天皇に向つて忠を效すの一點に歸著す可きものである。

支那では『身體髮膚之を父母に受く。敢て毀傷せざるは孝の始なり』と云つて、肉體を父母の遺體として大切に保存す可きことを教へてゐる。我が日本に於いては、それはそれとして、寧ろそれ以上に我等が健康を保持せねばならぬのは、病弱の身體では、國家萬

我身の一切は忠の爲

一切は國家奉仕の爲

武門政治と忠の行方

一の御用に立つ事が出来ぬからである。

即ち我が日本國民としては、肉體の健全を圖るも、國家に奉仕せんが爲である。智を磨き、徳を修むるも、國家に奉仕せんが爲である。家庭を清淨にし、父子相親しみ、夫婦相愛し、兄弟相和し、完全なる家庭を作り上げるも、國家に奉仕せんが爲である。

國家は即ち天皇の治しめし給ふところの國家にして、國家に奉仕する事は、天皇に奉仕する所以である。即ち日常生活の上より、社會の凡有る人事の末に至る迄、其の歸著するところは、國家に奉仕するの一點にあり、之が乃ち忠孝一本の意義である。

然るに我國に武門武士の階級生じてより、漸次家の子郎黨なるも

徳川時代の忠の對象

の生じ、更に封建の制度を爲し、武門政治となつて、愈々天皇と將軍とが對立するが如き、二元的の組織となり、其爲に折角の忠も其の對象物を失ふに至つた。

徳川時代に於いては、少數なる識者を除けば、多くの學者先生は、忠とは誰に向つて忠であるかと云ふ事を、明白に説明し得る者が無かつた。唯だ彼等の忠は、第一は其の藩主に對する忠であり、第二は將軍に對する忠であり、第三が天皇に對する忠であつて、中には藩主に忠なるを以つて忠の限度とし、藩主は將軍に忠なるを以つて忠の限度とし、將軍は天皇に忠なるを以つて忠の限度となすが如く、一般國民の忠の對象物は、天皇でもなければ、將軍でも無く、銘々の藩主、若しくは領主、更に云へば地主にあつたと云ふも差支

無い程であつた。

斯る場合に於いて、日本國は何人が其の土地を領有するも、悉く皆な天皇の治しめすところの土地にして、日本國民は如何なる領主に屬するも、悉く皆な天皇の大御寶であるといふ事を、明らかにすることになつたのは、漸く孝明天皇の御宇よりして、明治天皇の御宇に至つての事である。

此の如き大なる眞理は、千萬卷の書を読んだる學者先生よりも、却つて上州新田郡の百姓の倅である高山彦九郎などが、先づこれを意識するに至つて、天下に向つて之を絶叫したのである。

學問は眞理の林を分け入る爲に、大なる道を開く爲の學問である。然るに往々其の眞理の林から遠去りたる荆棘の中に、人を踏み迷は

せる事となる。我等は學問に感謝すると同時に、學問に向つて又苦情を云はねばならぬ事がある。一度足を間違つた道に踏み入るれば、深く入れば深く入る程、其の間違が遠くなる。其の間違が深くなる。それから踏み抜け難くなる。明治以來の學問も亦た此通りであつた。

第十二 明治維新と尊皇攘夷

話は元に還つて、日本の國體は皇室中心であり、日本臣民の道は皇室に向つて忠を盡す事であり、其他の事は總て此の大本、大體より割出し來るところの條目である。今日では君と云へば、天皇陛下

で在すといふことは、國民學校の生徒さへも、能く承知してゐる。然るに明治の初期頃までは、尙ほ君と云へば、藩主の外には無いものと思ひ、例へて云へば藩主が父であり、將軍は祖父であり、畏れながら 天皇を以つて曾祖父に擬したるものさへあつた。然るに其の舊來の陋習を一新する事が出来たのは、全く明治維新の賜物と云はねばならぬ。

明治維新の改革運動は、全く尊皇攘夷の題目に依つて出で來つた。尊皇に就いては、固より天壤無窮に治しめす天皇を尊ぶ事であつて、天皇の外に君は無いといふ、即ち一君萬民の本來の面目に立戻る事であつて、それ以外に説明する必要も無ければ、それ以上に

X X X

研究する必要も無い。

併しながら攘夷の問題に至つては、多少の解釋が必要である。攘夷と云へば、夷狄を追ひ拂ふといふ意味であつて、之を排外思想の表現視するは免がれぬ所であるが、それは支那流の攘夷である。支那が即ち支那の周邊に群がる東夷西戎、南蠻北狄と稱する者に對する防禦を意味するものと、明治の大改革を請來したる攘夷とは、大いに趣を異にしてゐる。

日本の攘夷は決して排外では無い。排外どころか日本は凡有る外國の人でも物でも、之を招撫し、之を綏服せしむる事を事としてゐた。即ち世界萬國の民をして其所を得しめ、世界萬國の民をして其堵に安んせしめんとするが、即ち我が皇道であつて、排外は我が

日本の攘夷
とは如何

皇道とは絶対に相容れないものである。

従つて日本の攘夷は、排外でない事は明白である。日本の攘夷は即ち外國の勢力を以つて、日本を侵略し、日本の國體を冒瀆し、若しくは日本の國權を蹂躪し、若しくは日本の國利民福を阻害するものに對して、之を掃討するの意味である。

即ち蝦夷の亂を平げたのも、攘夷である。熊襲の亂を平げたのも攘夷である。元軍百萬の兵を討掃したのも攘夷である。而して廣義に云へば、明治二十七八年戦役も、三十七八年戦役も、乃至は滿洲事變、支那事變も、又大東亞戦争も、皆な攘夷の意味を擴充したるに外ならない。

日本の攘夷
の例

積極的攘夷

朝鮮問題と
日清、日露
の役

第十三 日本の攘夷と正當防禦

これは正しく云へば、積極的攘夷と云つても差支あるまい。日本は何故に蝦夷を平げたる乎。何故に熊襲を平げたる乎と云へば、我が大八洲は天孫の治しめす地域であるに拘らず、其地を侵略せられ、若しくは其地に蟠居し、皇化に服せざるが故であつた。元の來寇に當つても亦た同様である。

即ち朝鮮問題に於いて、初めに支那と相戦ひ、後に露國と相闘つたのも、朝鮮は所謂我が外府にして、日本の治安を保つ爲には、外國の勢力を此處に入れる事が、絶対に不可であつたが爲である。

來つたが故に、我等は已むを得ず干戈に訴へるに立至つたのである。
これは聖詔に明白に掲げられてあつて、恰も日月の天に麗るが如く、明白である。

第十四 皇政維新と皇政復古

尊皇攘夷に就いては、略ぼ前に申したる通りで明白と思ふ。これより更に皇政維新と皇政復古とに就いて語る必要がある。我等の先輩は、孝明天皇の御宇の末期から、明治天皇の御宇の初期に於いて盛んに皇政復古を唱へた。同時に何時の間にか皇政維新を唱へた。

維新と復古とは、當時に於いては殆んど同じ意味に受取られてゐた。復古即ち維新、維新即ち復古といふ意味に解釋せられてゐた。即ち復古論者が維新論者であつて、維新論者が復古論者である事に、何等疑ふ筋も無く、訝る可き理由も無かつた。

それは復古とは本來の姿に立還る事である。維新とは從來の陋習を拂拭する事である。從來の陋習を拂拭する事は、とりも直さず本來の面目に立還る事であるからして、復古をする爲には維新の必要があり、維新をする爲には復古の必要がある。

一例を舉げて云へば、江戸幕府を廢する事は、即ち維新である。天皇親政を行ふ事は、即ち復古である。天皇親政を行はんとすれば、江戸幕府を廢せねばならぬ。江戸幕府を廢する事は、天皇親政

を行ふ所以である。故に維新と復古とは言葉の相違であつて、同一意義に受取られたのは、無理も無き事であつた。

然るに明治の初期から、復古と維新とが、漸く別なものとなつて来た。それは何故かと云へば、復古派は何處までも復古の二字に泥んで、飽迄舊來の面目に立戻さんとした。併し歴史は發展し、時代は進歩する。如何に舊來の面目に復せんとしても、復する事が出来るものがある。恰も元着た着物であるからとて、箆笥の奥に藏ひ置きたるものを取出して今着ても、身に著かぬ事は當然である。何故なれば着物には變化は無いが、身體には變化がある爲である。

そこで復古派は維新の當初より所謂る奈良朝の古に我が朝廷を

還し、一切の制度文物を其儘行はんとしたが、其の時代では日本は唯だ日本一國で國を立て、相手としたのも漸く支那、朝鮮、若しくは渤海といふに止まつた。然るに今日は所謂る世界萬國對立の世の中で、日本の對世界の位置は、頗る變化を來してゐる。

そこで又た維新派は、復古などといふことは打忘れ、唯だ一新、一新といふ事になつて、當座の事態に相應する事のみを努め、其故に動もすれば手から口といふ事になつて、此に復古派は頑冥者流と呼ばれ、維新派は輕薄者流と呼ばれ、遂に昨日までは互に仲間であつた者が、鎗を削らねばならぬ事に至つたのは、明治の初期に於ける寔に悲惨なる出來事であつた。

然るに復古派は漸次敗北し、年代と共に維新派は愈々勢力を得、

遂に明治の中期から末期に至つては、全く維新派の全勢力となつて
來た。其の結果が所謂の西洋崇拜となつたのである。これは明治時
代に限つた事で無く、我が奈良朝以來、隋唐の文化を我國に輸入し
たる際にも亦た同様であつたが、明治以來泰西の文化を輸入するに
至つて、特に然るものがあつた。

第十五 尊皇攘夷と條約改正問題

翻つて政治の上から見れば、尊皇の目的を達する爲に、慶應三
年の十月、二條城に於ける徳川最後の將軍の辭職あり。其の翌年、
即ち明治戊辰正月、鳥羽、伏見の役あり。やがて官軍東下、江戸

城受取り渡しとなつた。更にそれが東北、北越の戦より會津の籠
城を経、明治二年の函館の戦争となり、これを以つて漸く統一の業
を遂げたが、然も割據の制は依然として存してゐた。
そこで各雄藩が主となり版籍奉還の舉となり、それも唯だ名義を
變更したといふ事に止まつたから、遂に明治四年七月に、廢藩置縣
の舉となつて、此に漸く日本統一の目的が達せられて、尊皇の實が
行はるゝに至つた。

併しそれが愈々全く成就するに至つたのは、明治十年、西南の役
を終つてからである。
これに反して所謂の攘夷の目的なるものは、如何であるかと云へ

ば、純粹の復古派は、武力を以つて彼等を追ひ拂ふといふ事であつたが、維新派はそれでは攘夷の目的を達する事は出来ない。攘夷の目的を達するには、平和的手段を以つてせねばならぬ。それには先づ條約改正が第一であるといふ事になつた。

日本は舊幕府時代に外人の爲に法權を奪はれ、稅權を奪はれ、日本國內に於ける外國人は、勝手の振舞を爲し、恰も一國の中に敵と同居してゐる如く、何事も我意の思ふ如く出来ない。そこで條約改正を爲す可き期が到來した。廢藩置縣の後には、其事に取掛り、岩倉、木戸、大久保などの所謂穩健なる維新派の政治家をして、米國から歐羅巴に赴かしめ、其事に従事せしめた。

x

x

x

扱愈々彼等が米國に至つて相談を始めたところ、談笑の中に出來ると思つた事が、案に相違して少しも齒が立たなかつた。米國然り、況んや英國に於いてをや。況んや佛蘭西に於いてをや。獨逸、露西亞勿論である。斯くて彼等が明治四年の末から六年の半ばにかけて外國を廻つて得たる經驗は、唯だ條約改正はとて一朝一夕で出来る事では無い。これをやるには日本を尠く共其の制度文化の上に於いて、歐米諸國と對等の位置まで引上げるの外に道は無いと觀念して、歸朝せしめたに過ぎない。

然るにそれを爲すには、如何にして爲すかと云へば、なかに一朝一夕で出来る事では無いからして、條約改正を爲すためには、飽迄も外國の、制度、文物を採り入れねばならぬ事となり、其の結果

は遂に鹿鳴館の夜會とか、假裝舞踏會までやつて、外人の甘心を得る事になつた。

假裝舞踏會が攘夷から生れて來たといふ事は、如何にも意外の話であるが、其の本源に溯れば、攘夷の精神が廻り廻つて、假裝舞踏會にまで發展し來つたのである。

第十六 尊皇攘夷の意外なる到著點

要するに攘夷論者が當初は攘夷をする爲に、西洋館を焼打ちするやら、西洋人を辻斬りするやらした者が、眞の攘夷は彼に倣うて始めて彼を制する事が出來るといふ事に氣が付き、それが段々進んで

纏ては攘夷論者の骨頂が、西洋感染の骨頂となり、一も西洋、二も西洋、三も西洋といふ事になつて來た。

それと同時に尊皇論者は何時の間にか薩長藩閥に抵抗し、有司專制を打破する爲に、自由民權論を提唱し來り、それが民選議院論より、國會開設請願となり、國會開設請願より、憲法制定論となり、やがては議會中心主義、政黨内閣論、普通選舉まで發展し來つた。

此の如く尊皇論から議會中心主義に至り、攘夷論から人種改良論に至る其の距離は、頗る遠く且つ曲折してゐて、恰も山芋が化して鰻となり、蛤が變じて雀となるよりも不思議であるが、然も其の經過の道行を顧みて見れば、正に其通りと云はねばならぬ。

而して其の攘夷論が遂に日本精神論に立還り、尊皇論が皇室中心

主義に立還るに至つたのは、凡そ明治維新より五十年内外を經過したる後であつた。

今日の人々は攘夷論が洗練して、日本精神論となり、尊皇論が醇化して、皇室中心主義となつた事に就いて、何等の不思議も感じないが、明治、大正の時代を舞臺としたる人々にとつては、寔に意外千萬であつて、所謂る古人の、

踏み迷ひてぞ花は見るべき

とは、先づ此事であらう。

第十七 實力解決の條約改正

扱ても攘夷論者の一部である人々が、平和的攘夷策として、取敢へず我が法權と稅權とを回復せんとする條約改正の仕事は、明治四年岩倉、木戸、大久保等が其の目的を以つて米國から歐洲に出掛け、て以來、凡有る功夫を凝らし、凡有る智慧を絞り、時としては先づ日本の社會を改良して、歐米同様ならしめんとし、四十、五十の中華に洋服を着せ、夜會やら、舞踏會に引張り出し、出來得可くんば皮膚の色も白くし、眼の玉も碧くし、髪の毛も赤くせんと企てた。

又た民法や刑法や商法や、凡有る法典を一夜潰けに製造し、強ひて外人を安心せしむる爲に、法權回復の方便として、外國人を日本の裁判官に使用せんとした。而してそれでは異論がありとて、其の外國人を日本に歸化せしめて使用す可しなどといふ、随分小細工を爲

した。

一方では條約勳行なるものを實行し、條約の許す範圍に於いて、凡有る限り外人に不便利、不都合、迷惑や當惑をかけ、彼等がたまり兼ねて悲鳴を擧げ、それで條約改正に承知せしめんとする功夫を凝らすなど、今日から思ひ出せば、抱腹絶倒の事もあつた。

而して其爲に幾多の内閣は倒れ、幾多の政治家は其の椅子より墜落し、或は爆彈騒ぎまで起つたけれ共、正直のところ、條約改正はそれ等の込み入つたる小細工よりも、寧ろ明治二十七八年戦役に、其の成功の端緒を見、明治三十七八年戦役以後に、漸く其の目的を達成する事を得た。即ち如何なる政治家の手腕も、如何なる外交家の技術も、施すに所無く、却つて我が兩回の戦争で勝利を博したる

事が、効果的であつた。

斯る次第であれば、西郷南洲が内治などは姑らく第二に措き、先づ日本の國力を外に向つて増進す可く、朝鮮問題を提議したるが如きは、餘程の大見識であつたと云はねばならぬ。

第十八 有史以來の日本と朝鮮

我等は日本は肇國の當時より、大陸國であり、同時に海洋國であるといふ事を明言した。大陸國としての關係は、日本對朝鮮の關係に就いて、觀察せねばならぬ。素戔鳴尊が楠や杉で磐船を作り、それにて大陸と本島との間を往來在らせ給うた事は、言ふ迄も無く、

國史有りて以來、朝鮮問題は日本の政治的痛であつて、多くの政治家が之に悩まされた。これは日本と朝鮮とが、全く日本海を隔て、互に呼ばへ響へんとするところの地理的關係あつたが爲である。其他人種的關係、文化的關係、經濟的關係などといふものも計上せねばならぬ。併しながら何よりも必要の件は、地理的關係であつた。

朝鮮なる國は、アジア大陸の東方、日本海と黄海に突出したる半島にして、此の半島は、漢民族の勢力が旺盛なる時には、漢民族が之を支配し、又塞外民族の勢力が旺盛なる時には、塞外民族が之を支配し、我が大和民族の勢力が旺盛なる時には、大和民族が之を支配した。従つて朝鮮半島そのもの、獨立國としての存在は、有史

以來皆無ではなかつたが、それは概ね名目だけであつて、事實は此の三方の勢力の何れかに從屬し、若しくは其の附庸としてゐた事は、歴史的大なる事實である。

我が有史以前に於いては、恐らくは大和民族の勢力が、朝鮮半島を掩有し、鴨綠江の右岸にも及んだものであらうが、漢民族の勢力が支那を席卷したる時に於いては、悉くとは云はぬが、朝鮮半島は殆んど漢民族の支配下に在つた。漢の武帝の時代に於ける朝鮮は、漢の植民地として、新たなる文化を大同江畔に植付けた。

其の時代に於いて、日本と如何なる交渉があつたかは、今茲に詳らかに語る事が出来ぬ。然も唐の勢力の旺盛なる時に於いて、之と衝突したる事は、我が國史の上に明瞭である。

第十九 争地としての朝鮮

朝鮮に損し
内治に得

而して其の結果、我が日本國の勢力は朝鮮より敗退し、其爲に却つて日本は内に於ける豪族割據の陋習を芟除し、初めて完全なる中央集權の政治が布かるゝに至つた事は、史家が『外に失つて内に得たるもの』として、日本は朝鮮に於いて損をし、内治に於いて得たといふ觀察を下したる者も少くない。

朝鮮は争地

何れにしても朝鮮は争地である。『彼取る彼の利、我取る我の利』で、各種の民族が互に之を争ひ、殆んど其爲に寧日無きに幾かつた。困つた者は朝鮮人のみであつた。

蒙古の來寇
と朝鮮經由

即ち蒙古の勢力が、北邊の沙漠より勃興し來るに際しても、支那を征服し、其の勢力を以つて朝鮮を掩有し、更に朝鮮を經由して、我國を征服せんとした。當時朝鮮の鎮海灣は、蒙古軍の根據地にして、朝鮮人を案内者として日本に襲ひ來つた事は、明白なる史實である。勿論宋の降將范文虎等をして、江南即ち今日の寧波方面より、大なる戰艦を日本に差向けたが、併しそれは寧ろ別働隊と見ても差支無い。

征韓の目的
は征明

何れにしてもアジアに於ける諸民族が、日本を侵さんとするには、必らず先づ朝鮮を取つて根據地とする事は、三千年の歴史を一貫したる事實である。されば秀吉の兵を朝鮮に向つて出したるが如きも、其志は朝鮮でなく、明であつた事は明白であり、唯だ其事

が秀吉の晩年であつて、秀吉自身の権が緩み、其の號令が思ふ通りに行はれず、其爲に韓國七年の役となつたのであつて、秀吉の志は、朝鮮などは門から玄關に達する迄の道路に過ぎなかつた。

第二十 明治政府と朝鮮問題（一）

——木戸孝允の主張——

されば明治政府が尊皇攘夷の標語に依つて、幕府に代つて出で来るや、倒幕者の隨一とも云ふ可き木戸孝允の如きは、主として先づ手を朝鮮に着けねばならぬ事を主張した。彼は明治元年から明治二、三年にかけては、朝鮮論の發頭人とも云ふ可き一人であつて、先づ其の同志である大村益次郎に之を説いて、遂に同意せしめた。

更に三條、岩倉の二卿に向つて之を勸説し、遂には自ら支那、朝鮮に赴く可き使節の役目を買つて出で、愈々出發せんとするに際し、偶ま長州に於ける奇兵隊の騒ぎや何かで、それが行はれず、總てそれが済んで明治四年の廢藩置縣となり、間も無く彼も岩倉大使の副使の一人として、米國から歐洲に出掛けた。

木戸が其の同志の士である、三浦梧樓に、明治元年に詩を賦して與へたものを見るに、左の如きものがある。

大政一新之歲所作 爲三浦盟兄

木戸 松菊

速討逆賊一行征誅

天下只應定遠謨

錦旗日暖紫宸殿

朝冠穿霞四達衢

號令一發世道肅
億萬黔黎總兄弟
聖意夙斷文武事
往四方問無禮
版籍何地先連屬

邦内先禁互爭
忠孝只在靖寰區
皇基從是正涼乎
公戰奮闘我忘吾
明窓靜閱韓國圖

然るに此の朝鮮征伐の發頭人が、明治六年、愈々朝鮮政府が日本の使節を受付けず、日本に向つて暴戻侮慢なる文書を公表し、我が隣好に酬ゆるに侮辱を以つてするに際し、西郷が自ら一役買つて、朝鮮に赴かんとする時、最も之が反對の急先鋒となつた者は、木戸孝允その人であつた。固より反對の聲は殆んど悉く岩倉大使一行の人

人の口より出たが、其の第一聲を擧げたのは、誰よりも先づ木戸孝允であつた。昨是今非とは、正に此事であらう。何故に斯く短き時間に、木戸の意見が掌を返すが如く變つたかと云へば、彼等が歐米の文物に陶酔したるが爲と云ふの外はあるまい。彼等は米國から歐羅巴諸國を廻り、談笑の中に條約改正を仕遂げんと思つたのが、案に相違して一切齒が立たぬ事になり、これではとても歐米と競争が出来ぬ。況んや對立などは全く絶望である。彼等は何よりも先づ自國の文化の程度を向上せしめ、漸次富強の道を辿つて、然る後の相談であると覺悟を決め、それで朝鮮に兵を出す事などは、以つての外であるといふ事から、それに反對したものであらう。

これは決して木戸ばかりでなく、岩倉でも、大久保でも、皆な同一である。唯だ茲に木戸を擧げたのは、木戸其人が餘りに當初は朝鮮屋であつたのが、懸てはそれに唾も引掛けぬといふ状態になつた爲に、特に其の標本として掲げてゐるに過ぎない。

第二十一 明治政府と朝鮮問題(二)

——西郷南洲の達見——

此の機會に於いて、予は西郷南洲の所謂る征韓論なるものに就いて、一言して見度い。西郷は初から朝鮮に兵を差向くるは、大義名分に於いて明白を缺く故に、我より立派な人物を朝鮮に送り、而して平和的談判を試み、それに應せざるのみならず、其の特使を殺害

するに至つて、此に初めて正々堂々、其罪を正して軍を出す可しといふ論である。

世間では西郷は死ぬる爲に朝鮮に赴くのである。即ち西郷が行けば、きつと朝鮮人が西郷を殺す。其殺されて出師の名義を得る爲に出掛けるのであると云ふが、予は必らずしも然りとは思はない。それは最惡の場合に其通りであらうが、若し萬一朝鮮が西郷の言ふ事を聴いたならば、西郷は朝鮮と攻守同盟を結び、以つて露國に當る積りであつた事は、決して疑ひを容れぬ。

併しそれは取らぬ狸の皮算用であるから、其事は姑らく言はずに、殺された場合には斯くす可しと云うてゐたのであらう。又た西郷ほどの人物であつたから、死は固より覺悟の前と思はるゝ。併

し死を決して赴く事と、必らず死せねばならぬといふ事とは、別問題である。何人も死を決して戦場に赴くが、決死の者が皆な死なねばならぬといふ理由は無い。敵に勝つて生還したとて、恥辱で無いのみならず、立派な武功である。

西郷が朝鮮を以つて露西亞に當る楨杆としたことは、西郷が明治七年正月、即ち彼が辭職の翌年、庄内の酒井玄蕃に語りたる同人の手記に、よく掲げられてゐる。反對派は、朝鮮に事を起せば、露國との葛藤を惹起せねばならぬといふ事を心配して反對したが、西郷はそれを覺悟の前であるのみならず、寧ろそれを起さん爲に、朝鮮に手を出す積りであつた。

x

x

x

西郷は此儘愚圖々々してゐれば、露國は必らず我が北海道に手を著くるであらう。北海道の防禦を北海道とするのは、愚の至りである。それよりも朝鮮に突出して、朝鮮から露國の側面を攻撃する時に於いては、露國は決して我が北海道に志を逞しくする事は出来ぬ。即ち西郷は朝鮮問題を以つて、朝鮮のみの問題とせず、これを以つて對露問題の鍵としたのである。此の西郷の見識は、明治二十七八年の役に至つて漸く事實として表はれ、更に十年を経て、明治三十七八年の役に於いて、大いに現はれて來た。

要するに攘夷派が開國派に轉向したのは、決して攘夷の精神を失つたのでは無いが、其の轉向の餘、外國の文物に陶醉して、其の結果は自制といふよりも、寧ろ其の自覺を忘却して終つた。これを取

一貫せる日
本の歴史

戻すに至つたのは、明治の末期から昭和の御代に至つて、漸く出来た。全く出来たとは云はぬが、出来つゝあるのだ。

第二十二 日本歴史と世界の光たる日本

日本の歴史は一貫してゐる。肇國の初より現代まで、一貫してゐる。否な實を云へば、有史以前、神代の古より、今後悠久なる未來まで一貫してゐる。即ち後を顧れば無限であり、前を望めば無極である。これが我が皇國歴史の本色であり、且つ特色である。

何れの國にも歴史はあるが、それが斷續してゐる。然るに我國の歴史には斷層が無い。其環が時としては大に、時としては小になる

日本歴史に
斷層無し

盛衰あつて
も存亡無し

が、併しながら環は環と相接して、未だ曾つて斷間が無い。

即ち我が皇國の歴史には、盛衰はあつても存亡は無い。安危はあつても生死は無い。如何にも難有き歴史である。されば其の歴史の如何なる部分に觸れても、それが歴史全體に波動を及ぼす事は、電線の一點に觸れて、それが全線に感應すると同様である。

即ち我が大東亞戦争の如きも、我が國史の中の山の一である。或は其主なる山の一と云ふ事が適當であらう。然も其の由来を知るには、山脈を辿つて、後へくと願望せねばならぬ。最近に行はれたる支那事變は勿論、それに遡つたる滿洲事變、更に遡つて云へば、第一次世界大戦、それよりも最も大なる山脈の一は、明治三十七八年戦役である。更にそれより遡れば、明治三十三年の義和團事件で

國史中の主
なる山脈

ある。それより更に大なる山脈は、明治二十七八年戦役である。

芝居で云へば、明治二十七八年戦役は序幕であり、明治三十七八年戦役は中幕であり、今回の大東亞戦争は第三幕である。何人が其の筋書を書いたか、ちやんとそれが首尾互に相ひ連絡してゐる。

故に唯だ一個の大東亞戦争として彼是れ觀察せんとしても、とても其の意味が徹底的に判る筈が無い。我等は大きく云へば、日本國史を腹の中に呑み込み置き、手近く云へば明治回天史より以來、最近百年に幾き歴史を呑み込み置いて、然る後に初めて此の戦争の意味が能く諒解せらるゝのである。

『光は東方より』と云ふが、其の東方の光は誰が照らさねばならぬ

x

x

x

乎。日本の使命は即ち其光を照らす使命である。光を照らす爲には、日本自身が先づ自ら光たらねばならぬ。而して其光は螢の光や雪の光などといふ様な、纖弱きものではない。

即ち萬物を生育するところの、時としては萬物を焼き盡すところの、太陽の光でなければならぬ。光には必らず熱が添ふものである。其光は即ち我が皇室の光であつて、皇室の光が表はれて、初めてそれが日本の光となり、日本の光が表はれて、初めてそれが東亞の光となり、東亞の光が表はれて、初めてそれが世界の光となる。

而して世界を照らすの光も先づ自ら照らす光とならねばならぬ。所謂尊皇論の出で來りたるは、先づ自ら照らす光を世に表はさんが爲であつた。其光が一度光つて、皇室中心の大義が、日本全國に

完全なる獨立國としての自覺

明治天皇の盛徳大業の

行き互り、而して後、此に初めて日本國が精神的にも、物質的にも、完全なる獨立の國たる事が出来る。

此の如くにして、初めて日本國が完全なる獨立國の實力を保有し、且つ發揮する事が出来る。此の如くにして初めて日本國が、完全なる獨立國としての自覺が出来る。此處まで辿り着くには、寔に容易の事では無かつた。

日本國を導いて此に至らしめ給うたのは、畢竟、明治天皇の盛徳大業にして、又之を輔翼し奉りたる我等の先輩の努力も、大いに感謝せねばならぬ。

第二十三 日本の完全獨立と朝鮮

見通し難き數國

日本神代と朝鮮

扱て日本國が自ら目覺めて、東方の光たる事を自覺する際に於いて、其の周圍を見廻せば、見通し難き數國がある。第一は朝鮮である。第二は支那である。第三は露西亞である。第四は英國である。第五が米國である。次には其他の歐洲諸國である。

此に朝鮮を第一に擧げたのは、何故である乎と云へば、朝鮮それ自身は、日本を脅威する程の強大國ではない。固より怖るゝにも足らねば、憚るにも足らない。神代の古は我が日本の一部であり、即ち有史以後も、全部とは云はぬが、其の幾分は我に従屬した事は、我

が國史に明瞭である。

されば隣國として、其國を第一に擧ぐるは、其國が有力である爲でも無ければ、又必らずしも文化的模範國たる爲でも無い。朝鮮は何でも無いが、其の朝鮮には必らず背後の力が伴ふものであつて、或時にはそれが支那であり、或時にはそれが露西亞である。又時としてはそれが英國であり、米國である時さへもあつた。

特に支那と露西亞との勢力は、直接に我に迫らずして、朝鮮を通して迫り來つたから、朝鮮問題は或時には對支問題となり、或時には對露問題となり、其爲に頗る重大なる問題が出で來つたのである。此の問題の爲に、明治天皇の御宇史には、凡有る事件が出で來つた。明治四年の廢藩置縣以來、僅かに二年を経るや否や、一大分解

作用を、廟堂の上に来したのも朝鮮問題の爲であつた。
當時の野調に、

西郷死するもこれがため、大久保死するもこれがため
と云つたのは、尠く共半分の眞理はある。

爾來幾多の曲折を経て、最初にはそれが動機で、遂に支那と二十七八年戦役を發生した。又それが動機で、露國と三十七八年戦役を發生した。相手は變るも、問題はいつも朝鮮であつた。

それ程迄に朝鮮は重大なる關係を、我が國史の上に有つてゐた。何んとなれば、朝鮮を我が領土内に加へざる限りは、我國は常に大なる脅威を受け、所謂る皇國の完全の獨立は、保障することが出來

ぬからである。それが漸く明治四十三年、日韓併合に依つて片付いたのは、日本の歴史が初めて神代の古に還つたと同様であつて、遂に明治天皇の御宇史中に、特筆大書す可き、大なる勲業であつた。

第二十四 隣國支那の歐米依存

次には支那である。日本の光は近くより遠きに及ぼす可きものであるから、先づ隣國の支那に及ぼす可きが當然であつた。此に及ぼすといふ事は、維新以後のことであつて、公平に云へば我が日本は、寧ろ支那より凡有る多くの感化を受けた。それが悉く我等にとつて幸福であつた乎否乎は、姑らく措き、

隣國として
の支那

支那の感化
と日支提携

文化的には爾餘の諸國から受けた感化を一括しても、とても支那より受けた感化には及ばなかつた。それで我國は自ら改革すると同時に、支那の改革せんことを望み、自ら強大なると同時に、支那の強大ならん事を望んだ。即ち支那と提携せんことを、眞面目に考へた。これは明治初年以來、我國の國是であつて、副島種臣、大久保利通、伊藤博文、森有禮、其他大小の人々、經國の士にして、一人として我國に於いて此感を抱かぬ者は無かつた。

然るに支那は我國に對して、全く別様の考を有つてゐた。第一には支那は日本に對して認識不足であつた。我國を眇たる小島國と見て、殆んど相手にもしなかつた。我國が泰西の文物を採り入れるの

支那の對日
認識不足

を見ても、殆んど之を莫迦にしてゐた。

それで我國は眞面目に手を差出して、支那と提携せんとしたが、支那はなか／＼それには應じなかつた。支那は一言すれば、日本の勢力を過小視し、歐米の勢力を過大視してゐた。故に常に遠く結び、近く攻むることを以つて、其の外交方針とした。

即ち時としては露國の力を假りて、時としては英國の力を假りて、時としては米國の力を假りて、其他凡有る諸國の力を假りて、日本に當らんとしたのである。其の迷夢が今日に至る迄、尙ほ醒めやらず、蔣介石の如きは、尙ほ依然として英米依存で、今は其爲に四苦八苦、七轉八倒の窮地に陥つてゐる。

若し維新以來、日支の結合がうまく出来、此の二國が互に手を携

へて行つたならば、大東亞の世界に於ける位置は、最近百年の歴史に於いては、大いに異なるものがあつたと思はる。然も支那は常にアジアの敵として働いた。日本がアジアの光である事を忘れて、唯だ如何なる力を假り來つても、如何なる方便を以つてしても、日本さへ叩き付ければ、それで安心といふ如き、極めてつまらない妄執に捉はれてゐた。

第二十五 日本と露英米三國

日本の相手は支那ばかりでは無かつた。露國は北方より來つた。英國は西方より來つた。米國は太平洋を渡つて來つた。日本と露國

清朝の勃興
と日本の杞
憂

露國に對す
る北門の守
り

との關係は、徳川十一代將軍家齊即ち文恭院殿、當時大御所と云はれたる將軍の時代からである。

徳川初期には、明が滅び、滿洲朝廷がとつて代つたから、元祿以前の志士中には、或は清國が元の忽必烈の日本に對した歴史を繰返すが如きことはあるまいかと、懸念したる者もあつたが、それは一場の夢と化し去り、爾來日本では何等海外に心配らしき心配は無かつた。

然るに北方から黒雲の如く我國を壓して來たのが露國である。これが爲に幕府は鮮からず心配を爲し、日本の志士にても、敵は北より來ると考へ、北門の鎖鑰を嚴重にせねばならぬといふ考が出で來つた。

露國に對す
る長き恐怖
心

英米の二大
勢力

敵愾心の持
續

同時に露國は虎狼の國で、最も怖る可き國であるといふ事を我が國民の心理に植付けられた。露國に對する恐怖心は、明治三十七八年の役まで、一大勢力として存し、其の戦後に於いてさへも、未だ全く拂拭し難きものがあつた。

英國の勢力は印度を征服し、轉じて支那を襲ひ、香港を割取し、これ又た日本に對して容易ならざる威嚇を示し來つた。それに比すれば米國は、國を建つる日尙ほ淺く、單に通商貿易といふことであつたが、これも直接に水師提督ペルリが江戸灣まで乘込んで談判する際には、日本上下の人心を震動せしめた。

嘉永、安政以來此等の國に對して、日本が如何なる措置を執つたか

は、今此に語らざるも、日本は聖德太子が隋の煬帝に答へ給うたる、
日出處天子、致三日沒處天子、無レ恙。
といふ文句を使用された通り、支那に對して對等の禮を執り、毫も
自ら屈下するところが無かつた。此の如く此の精神は徳川封建時代
泰平の毒酒に陶醉して、殆んど日本人たる精神の大半を失墜したる
が如き當時に於いても、尙ほその腹底には、これと同様の精神を存
してゐた事は、攘夷論が一世を震動したることを以つても判かる。

第二十六 豊太閤と圖南の大志

抑々戰國時代、ポルトガル、スペインが、ローマ法王の特許を受

け、世界を中分して、各々其の版圖に加へんとしたる時期以來、彼
等の商船が、宣教師と共に我國に来るや、信長、秀吉、家康の如き
は、何れも之を利用するに於いては抜け目が無かつた。然も秀吉が
第一に耶蘇教禁制の令を布くに至りたるは、耶蘇教そのものが憎い
でも無ければ、嫌ひでも無い。但だ耶蘇教と共に、外國の主權が日
本内治に滲入し、外人をして我が内治に干渉の端を開かしめんこと
を慮つたる爲であつた。

秀吉の耶蘇教禁制は、教文を目的としたものでは無く、教文を手
段として日本に来らんとする外國の勢力を禁遏したものである。

伊達政宗が、

x

x

x

邪法迷邦唱不終。はんこくをまよはしとまへをほらす 欲征三疊國未成功。はんこくをせいせんとはつしていまだこうをなす
 圖南鵬翼何時奮。となんのほうよくなんのときにかよはらん 久待扶搖萬里風。ひさしくまつよえうばんりのかぜ
 と詠じたのは、何んであるかと云へば、彼等の日本に来るを迎ふるばかりでなく、寧ろ積極的に我より進んで我が勢力を扶植せんとしたるものである。圖南の鵬翼と云つたのは、今日我が皇軍が活躍しつつあるフィリッピンからマレー半島邊と考へて差支あるまい。
 秀吉が朝鮮を経由して、明に入らんとしたのも、又た呂宋の太守に向つて、日本に服従することを訓示したのも、要するに彼は日本を以て、東亞の光とならしめ、此に動かす可からざる大なる根據を作らんとしたものであつて、其の見識は實に及び難きものである。恰も今日の狀態を、彼は約三百五十年の昔に行はんとしたものである

と云つても差支あるまい。

今試みに日本がアシアに存在しなかつたならば、アシア十億の人類は、如何になつたであらう。露國の勢力を喰ひ止めたのも、英國の勢力を喰ひ止めたのも、米國の勢力を喰ひ止めたのも、又遼つてスペイン、ポルトガルの勢力を喰ひ止めたのも、皆な一に繋つて日本にあるではないか。

日本微りせば、遠き昔にアシアは全くアングロ・サクソン人の植民地化したらんも知る可からずだ。斯くして見れば、日本がアシアに存在した事は、大東亞興隆の爲には、唯一無二の條件と云はねばならぬ。

露國に對する防備

此の如く日本は自ら光るばかりでなく、東亞の光として、總ては世界の光となる可き運命を有つてゐる。

第二十七 幕末に於ける露國と英國

日本の心配は、前にも申した如く、第一が露國、第二が英國であつた。露國南下の勢力に對抗する爲には、幕府は松前藩の領地を直轄としたり、或は南部、津輕の兵を、北海道に動したり、それらの手段を講じた。又た最上徳内とか、間宮林蔵とか、近藤重藏とか云ふ探險家が出で來つて、北海道から千島列島、黒龍江、沿海州まで探險した。

杉田玄伯の親露論

而してその時分より、露國に對しては、如何に處す可きかといふ事が、大なる問題であつた。江戸時代の蘭學者の開山の一人とも云ふ可き杉田玄伯の如きは、とても露國と戦つては勝つ見込みが無いから、長い物には巻かれるの譬通り、露國と和親を結んだ方が、得策であらうと云ふ論を發してゐる。

安政年間に至つては、橋本左内の如きは、日本は英國と結ぶか、露國と結ぶかの外無いが、英國は餘りに狡猾で利己的であるから、寧ろ露國と結んだ方が宜からうといふ様な意見を吐いてゐる。

橋本左内の對露意見

日本沿岸に於ける英露

我國の北海道は勿論、對馬なども一時は露國に其の要港を占取せられ、漸く英國人の援助に依つて、それを退去せしむる事が出來た。

*クリミア戦争の餘波は、延いて日本に及び、日本の沿岸で露國對英佛の戦争が、殆んど行はれんとして、日本は中立を保つのに、頗る骨が折れた。

樺太問題の如きも、餘りに露國が五月蠅いから、體よく千島と交換したのである。千島と樺太とが交換出来るといふのは、まるで石と玉との交換も出来る様なもので、畢竟日本が露國を怖るゝ爲に、露國と事を生せん事を慮り、此の交換も出で來つたのである。

英人は流石に露人ほど露骨でも無ければ、むき出しに横車も押さぬが、併しその圖々しさに至つては、實に言語道斷である。岩倉公等が條約改正の勅命を帯び、アメリカから歐洲を巡廻したる時

に、安政條約を締結したるハリスは尙ほ存在し、其の一行に向つて、折角自分が日本の爲に苦心したる安政條約も、散々の目に逢つたと云つて、其の不平を洩らした。

これは畢竟パークスが英國公使として、それを勝手次第に自分の都合のよい様に改正せしめたのである。此の如くパークスは一方に於いては朝廷に味方する如き氣風を見せ、他方では幕府にも好意を示した。更に薩長人士と交驩し、其の人々より凡有る情報を得、それを自國に都合よく利用し、一方では搾り得るだけの甘味を搾り、他方では恩を賣つて、都合よき位置を占めてゐた。

英人は決して日本人の知己では無かつた。

支那に對する英國の惡辣

第二十八 東亞に於ける英國の惡辣

英人は又た支那に對しては凡有る惡事を働いた。阿片を押賣りし、而してそれを焼いたと云つて戦をして、其の結果價金を取るやら、土地を割かしむるやらしてゐる位で、其の惡辣は、惡魔さへも呆れる程のものであつた。

然も彼等は尙ほ支那に對しては相當の敬意を拂つてゐた。而して日本に對しては初から莫迦にしてかゝつて、相手にしなかつた。パークスの如きも、日本人から親友視せられ、大先生視せられ、大監督視せられ、パークスの一喝には、三條、岩倉初め、當時の參議連さ

日本を莫迦にする

英人に對する日本の態度

へも、震へ上るといふ程であつた。然るにそのパークスは日本を去るに際し、日本の前途を豫言して、『日本の前途は南米共和國の類であらう』などと云つた。當時の南米共和國は、内亂續きで、内に秩序を保つことも出來ず、外に國權を維持することも出來ない、憐れなる、慘めなる國であつた。その仲間日本を加へてゐるのである。それ程までの英人を、日本では後生大事に取扱ひ、今日我が日本が占領した香港の太守サー・ジョン・ホープ・ヘンネツシーが日本に來た時には、外國の皇族に比す可き待遇をした事は、當時其事を實見した、林董伯の『回顧録』にも掲げてゐる。

印度に於ける英國の暴政

英人の支那及び印度に於ける行動は、人類の凡有る罪惡史を以つ

袁世凱の活
躍と日支の
衝突

て、大いに朝鮮に向つて力を逞しくする事の機会を有たなかつた。
ところが支那では年少氣銳の袁世凱が、朝鮮に乗込んで、大いに支
那の勢力を張り、從來の有名無實唯だ名義のみの朝貢國とした朝鮮
を、實際の上にも支那の勢力の下に置かんとし、日本と屢々衝突が
あつた。其の舉句朝鮮に東學黨の亂が起り、それを機會に支那から
出兵して來、その出兵が動機となつて、日本からも亦た出兵する事
になつた。

日本を甘く
見た支那

當時支那では日本を頗る甘く見てゐた。特に駐日支那公使汪鳳藻
の如きも、議會と政府との軋轢が甚しく、日本の内輪の統一を缺い
てゐる事を本國に報知し、今が絶好の潮合と見て、日本を討つ可しの
論も起つたのであらう。併し李鴻章などは、必らずしもそれでは無

日本の勝利
と一大苦杯

かつたと云ふ説がある。

何れにしても清國が日本を甘く見た結果が、即ち明治二十七八年
戦役である。此の戦役の結果は、世界に向つて日本の強きよりも、
支那の弱き事を明かにしたが、戦争の結果、日本は一大苦杯を喫せし
められた。それは所謂三國干渉であつた。

x

x

x

三國干渉と
三斗の酢

此の三國干渉の結果、折角馬關條約で割讓せしめた遼東半島も、
むざ／＼返還せねばならぬ事になつた。日本にとつては戦捷の結
果、凱歌の酒の酢が未だ醒めぬ中に、全く三斗の酢を飲ませられた
も同様で、頗る不愉快千萬の事であつた。

英國日本の
援助を斷る

此際にも日本は英國の力を假りて、此の干渉を緩和せんとしたが、

英國は己に得の行かぬことであれば、何等加勢すべき筈も無く、全く之をはね付けた。そこで日本は百計盡きて三國の申す通りに叩頭する事となつた。

然るに此の事件より、やがて間もなく、支那は外國の勢力を假りて、馬關條約の眼目を無効ならしめたる代償として、凡有る代償を請求せられ、七花八裂の姿とならんとした。其の擧句は明治三十三年義和團の騒ぎとなり、列國の外交官は何れも北京の公使館に籠城する事となつた。

當時英國は日本に向つて、頻りに出兵を催告した。恰も日本を叱り付ける如き文句で之を催告し、其の入費の如きは、英國で支拂ふ

から、兎も角も先づ出兵せよと云つて來た事は、予の如きも、親しく之を聴いてゐる。

其の結果、彼等は日本軍の爲に救ひ出され、日本は實に列國の爲に火中の栗を拾つて、立派な役目を勤めた。そこで英國は愈々いざとなれば、アジアに於いては、日本ほど頼母敷き番犬は無いといふ事を、其時から氣が付いてゐたものと察せられる。

日英同盟は瓢箪から駒が飛出したのでも無く、灰吹きから龍が昇つたのでも無い。先づ日本を番犬として使用する必要上、英國が日本を認識したと云へば、認識したと云ふことが出来るであらう。

第三十 日清戦役後の親英論と親露論

日清戦役と
日本の正當
防禦

日清戦役は朝鮮が兩國争端の楔子となつた。これは清國が日本を甘く見繼つて、日本與し易しとしたからの戦争であつて、日本の立場は固より正當防禦であつた。其の結果は尠く共清國に對しては、韓國問題を片付けたが、然も依然露國との葛藤の種子は存在してゐた。

支那の瓦解
と露國の南下

而して此の戦争は、將來に向つて幾多の争の端緒を残した。何んとなれば一方に於いては支那それ自身が、これが爲に内外にかけ、土崩瓦解の状勢を來し、同時に露國の南下の勢は、愈々猛烈と

三國干渉と
日本の覺悟

なつて來た。「歡樂極まつて哀情多し」と云ふが、日本は戦争には勝つたが——然も豫想以上に勝つたが——然も世界に於いて男を上げたと云はんよりも、其の結果として、三國干渉を來し、三國干渉の前に叩頭した爲に、頗る男を下げた。人一倍體面を重んずる日本人が、之を恥辱と思はぬ者も無く、之に憤慨せぬ者も無く、應ては如何にして此の屈辱を雪ぐ可きかを考へない者は無かつた。

日支提携策
の失敗

其の結果として、日本は孤立してはともいかなぬ。何處にか其友を求めねばならぬといふ事に、實を云へば、日清戦争の未だ終らざる時から考へたのである。第一はビスマルクがオースタリーを破つて、直ちにそれと提携したる如く、支那と提携せんとした。支那の

中にて、張之洞とか、劉坤一とか云ふ者は、其考も自然其の方面に動いて来たが、李鴻章は却つて露國と密約をして、滿洲に於ける利權を、殆んど露國に賣却し去つた。斯る勢で、日清の同盟などといふ事は、とても思ふ様に參らなかつた。

それで相手は東洋に最も勢力のある二大國であつた。それは申す迄も無く、英國と露國とであつた。支那の利權は殆んど英國が専らにしてゐた。英國は尙ほ未だ日本を以つて、支那に於ける利權の競争者と認むるには、餘りに日本が弱小であつて、英國が強大であると思つてゐた。併し日本の武力は既に之を認め、團匪事件以後に於いては、最も之を認めたから、英國は日本を適當なる番犬と思つた事は、間違ひあるまい。

本文の記者は日清戦争以後、明治二十九年から三十年にかけて、ロンドンに在つたが、時の公使加藤高明（後に伯爵）君から聞いた事があるが、それに依ると、チエンバーレンは、頻りに日本と提携せん事を求め、それには當時日本が英國に注文してゐる『富士』『八島』の二艦があるが、英國も今は頗る多事であるから、其の二艦を英國に提供してくれたならば、英國の方でもそれをきつかけに、日本と握手する事が出来るであらうといふ様な話であつたと云ふ。話はそれきりであつたが、チエンバーレンの如きは、當時から日本にも相當に眼を著けてゐた事が判る。

併し日本の政治家は、寧ろ露國との協商を希望してゐた。英國と

は何等衝突す可き、焦眉の問題は無かつた。併し露國の南下の勢は、滿洲を席卷して朝鮮に及び、折角朝鮮から支那の勢力を驅逐して、却つてより大なる露國の勢力を迎へ來つた。恰も「前門狼を退けて、後門虎を進むる」の状態であつたから、斯る場合には、露國と相談して、適當の所で折合をつけた方が、日本の爲には得策ではあるまいかといふ考が出で來つた。

*伊藤、井上の二元老は勿論、山縣公にも當初は其考があつた様である。併し日本の輿論は、露國に對して臥薪嘗膽、十年一劍を磨くの敵愾心があつて、日露提携を希望する者は無かつた。要するに實際派は概して日露同盟論者であり、理想派は概して日英同盟論者であつた。

當時露國の使臣には、イズヴォルスキーがやつて來てゐた。イズヴォルスキーは、前回の世界戦争の前幕に、一役買った漢で、相當の手腕もあり、見識もあり、單純なる外交技師では無かつた。彼は電ケ關の當局者に對してばかりでなく、我國の各元老の間にも、大いに活躍して、日露同盟の可能性を鼓吹した。従つて我國には、日露同盟論と、日英同盟論とが、自然暗流となつて出で來つた。

第三十一 日英提携策と獨逸(一)

然るに露國の方では、三國干渉で日本を叩頭せしめて以來、日本がそれに向つて復讐するなどは思ひも寄らず、寧ろ日本與し易し

朝鮮に於ける露國

英國與國を求む

英獨提携論と日本加入

の威があつて、盛んに東方經營を事とし、旅順、大連は申す迄も無く、朝鮮京城に於いても、頗る活躍し。延いては馬山浦なども買収とか、租借地にせんとするの形勢を來した。

つまり日本は二十七八年戦役に、半島から支那の勢力を驅逐して、却つて露國の爲に贖立をした様な結果を來した。

これに反し、英國は内外にかけて、頗る調子面白からず、當初は光榮なる孤立などと云つて、其の傳統的の政策を誇つてゐたが、頻りに何れにか與國を得ようと思つて、實は探し廻つてゐた。

其の場合に於いて、英獨の提携論は出で來つた。これは英國ではチエンパーレンなどが、専ら主として首唱し、獨逸も當初は即かす

エツカルド
スタイン男
の暗躍

離れずの態度を示してゐた。然も此に又た其中に日本を加入せしめては如何といふ問題が出で來つた。

之は誰の發案であつたか知らぬが、在ロンドンの獨逸大使館員エツカルドスタイン男が、此事には暗中飛躍した。同人はロンドンに於ける獨逸大使館の一館員であつたが、獨逸皇帝の寵遇を得、謂はば獨逸皇帝から差遣された、御目附役同様であつた。従つて之を尋常の屬僚視す可きで無く、彼の言ふ所は獨逸皇帝の代言であり、又彼に告ぐれば、直ちに獨逸皇帝の耳に入り、尠く共彼は獨逸皇帝の爲には、電話器の役目をしてゐた。

それが恰も日英同盟論者である林董伯が、日本大使としてロンドンに在つた時であるから、尙ほ更好都合であつた。而してそれが恰

も第一次桂内閣の時に、日本に通報して来た。

最初は日露同盟論者であつた山縣有朋は、モスコウに於けるニコラス二世の戴冠式に於いて、ロバノフと日露協商を結んだ當人であるが、彼は爾來露國の日本に對する態度が、極めて不安心であるから、出來得可くんば日英同盟にと、既に其の當時は、其の意見を轉向してゐた。

但だ伊藤博文は、餘りに英國を知る事が深いから、桂が此事を伊藤に訊いた時には、『理論としては結構であるが、實行出來るかどうか懸念である』とのめかした。それは『英國は傳統的孤立の政策を執つてゐる。英國は自ら優越感を以つて日本に臨んで、日本と同

盟などをする筈が無い。又た英國と同盟しても、一旦緩急の時には、利己專一の國であるから、日本の役に立つ筈が無い』と云ふ様な事で、伊藤は寧ろ此際は進んで露國と提携した方が、得策であること信じ、自ら身を以つて、其事に當る事になつた。

第三十二 日英提携策と獨逸(二)

併し英國の形勢は、伊藤の思ふたよりも、餘程變化してゐた。彼は東洋に於いて適當なる番犬が欲しかつた。其の番犬としては、日本以外に候補者は無かつた。然も獨逸は頻りにそれを誘つた。而して出來上つた日英同盟の時には、獨逸は何時の間にか御免を蒙つ

て、それに加らなかつた。

獨逸は英國に向つて、「同盟などと云つて新たに作るまでも無く、獨逸には獨逸伊三國同盟があるから、英國もそれに加ふるは如何」と云ふ様な調子であつて、流石の英國も此上獨逸に向つて、同盟を強ゆる譯にはゆかなかつた。つまり獨逸は自分も加入すると云ふ様な調子で、日英を接近せしめ、いざとなれば自分は御免蒙つて、高見の見物をした。

これは何故であるか。種々と錯綜したる事情もあらうが、其一は獨逸の傳統政策で、露西亞を東方に追ひやらんとしたが爲であつた。露西亞の樽の口を東方に向けて仕舞へば、獨逸にとつて此上なく安心であるから、斯くせんが爲であつた。

今少し詳しく云へば、日本は決して三國干渉で黙つてゐない。併し日本國單りでは露西亞に向つて争ふだけの決心は着くまい。若し日英同盟が出来れば、日本も第三者の干渉の來る心配は無いから、必らず露國に向つて戰を挑むであらう。日露戰へば、何れが勝つても、獨逸にとつては相當の利益がある。

兎に角日英同盟に獨逸が斡旋したのは、日露を衝突させ、露國の勢力を歐洲の中原から追ひ拂ふ爲であつた事は間違ひあるまい。獨逸皇帝は世界の歴史に種々の惡戯をした。彼が爲に世界は鮮からざる迷惑を蒙つてゐる。三國干渉の如きも、獨逸皇帝が發頭人ではないが、(發頭人はウイッテ伯であると云ふ) 尠く其の主なる共謀者

である。特に黃禍論などといふ議論を援き來つて、盛んに宗教上の迷信薄からざるニコラス二世を煽て上げた事などは、彼の仕業である。日露協商が出来て、露國が東方から手を引く如き事があつたら、獨逸にとつて決して愉快な事ではなかつた。

第三十三 日英同盟と予の觀察

扱て愈々第一回の日英同盟は出で來つた。これは明治三十五年一月三十日に調印されたが、此の同盟の裏には、日露戦争が含蓄されてゐることは、今更申す迄もない。英國も咽喉から手が出る程、與國が欲しく、日本も同様であつたから、日英同盟は兩國で驩迎さる

可き筈であつた。然るに英國では恰も身分低き者に、可愛い女をやつた様な積りで餘儀無き勢で此くなつたといふだけの事で、驩迎などといふ事は無かつた。ところが日本では恰もお姫様を嫁に貰つた様な積りで、提灯行列やら、其爲に閣臣の爵位を進むるやら、授爵するやら、頗る賑々しき事であつた。

當時予は日英同盟の賛成者であつたが——何故なれば露國討伐の爲に——然もそれが必らずしも好影響を日本の人心に及ぼす可きものとは信じてゐなかつた。即ちそれは豫てより日本人は英米感染である。それが英國と同盟を結んだ時に於いては、更に其上に英國感染となる虞を豫期したからである。予は當時『日英同盟の國民的性

國民的自主
心を失はざ
る乎

格に及ぼす影響如何』と云ふ一文を舐したが、其中に、
知らず日英同盟が國民的政治上に就て、我が國民に與へたる安心
は、我が國民をして怠慢ならしむることなき乎。抑も亦此の安心
の原因は、世界雄國の一たる英國との提携にあるを以て、勢ひ英
國に向て依頼心を生じ、爲めに國民的自主心、國民的自立心を滅
殺し、若しくは消磨することなき乎。即ち安心の結果は、陽には
度外どわいに虚傲きよがうに奔り、陰には格段に卑屈ひくつに赴き、遂に健全、平正な
る國民的自覺心を失墜することなき乎。
と云ひ。更に又、

英國は世界に於ける雄國なれども、日英同盟の舞臺は單に清國以
東にして、明白めいはくに謂へば、清韓兩國の領域及び其の附近に外なら

同盟の舞臺
に於いては
日本優勢

す、而して此の舞臺に於ては我が帝國は英國の下風に就かざるの
みならず、寧ろ或は優るものあるに似たり。昔は織田氏の徳川
氏と相約して武田氏に當るや、徳川氏最も多く其の銳鋒に接せ
り。織田氏の覇を上國に唱ふるを得たるは、實に徳川氏の武田氏
を抑制したるによる。然も徳川氏は自から其の難きを擇んで辭
せざりし所以のものは、其の志あれば也。吾人は日英同盟を以
て、之に擬せずと雖も、同盟の舞臺に於ては英國は寧ろ多く我を
頼みとす可きの情勢を記憶せざるを得ず。之を要するに日英同盟
の結果は我が國民に向て、無形有形の大なる責任を増加したりと
云ふの一事は、總ての國民が、片時も忘る可らず。而して最後に
銘記す可きは、英國の我に向て求めたるは、我が實力あるが故に

して、苟も實力を失ふの日は、同盟の名は存するも、決して恃み
とす可らざることは是れ也。恃む可きは自個の力也。故に此の力を
増長せしむるに就ては、未來永劫國民一致以て盡瘁するの外、妙
策あるなし。(明治三十五年二月)
と、述べてある。

これは當時斯る議論を爲したる者が幾人あつた乎、予は記憶しな
いが、それよりも寧ろ提灯行列の方が繁昌した事は勿論である。

第三十四 日英同盟より日露開戦へ

日本は日英同盟が出来たから、直ちに露國に向つて戦を挑まんと

したものではない。露國は世界の一大國である。露國の怖る可き事
は、我等ばかりでなく、我等の祖父も、曾祖父も、否な其上に遡つ
て、徳川中期に於いて、既に人心に滲み込んである。

但だ日英同盟の爲に、露國と競争をするに適當なる足場を得たと
いふだけが、仕合せであつた。そこで日英同盟が出来たに拘らず、
露國は其爲に別に心配した様でも無く、但だ露佛同盟をアジア迄も
擴張して之に對應し、盛んに滿洲の經路より、延いて朝鮮に臨
み、動もすれば朝鮮を席巻するの勢を示した。

そこで日本の當局者は、滿韓交換論を以つて、之に臨まんとし
た。滿韓交換論と云へば、稍粗雑に失する嫌ひはあるが、謂はゞ

朝鮮の事は日本に任せよ、その代りに滿洲の事には、日本は決して容喙しないといふ事である。

然るに露國は滿洲は勿論の事である。朝鮮も大同江を境として、日本は大同江より南、露國は大同江より北と、恰も朝鮮二分論を以つて日本に臨んだ。而して其後幾多の談判を経たが、要するに露國は到底朝鮮を擧げて日本に委する考は無く、『朝鮮の領土の一部たりとも、之を軍事上に用ゆる事は出来ぬ。飽迄北緯三十九度以北の朝鮮を中立地帯とする』といふ事で、頑として應じなかつた。

それで日本では滿韓交換が最後の讓歩であつたが、その交換が出來ず、露國が滿洲を取るばかりでなく、併せて朝鮮をも之を取らんとする野心を示したから、今はこれ迄と、茲に日露の開戦は出で

來つたのである。

日露の開戦に就いても、種々の説があるが、要するにこれ又た日本を甘く見た結果であつて、其の日本も十分の廟算があつたと云ふ譯では無い。今は露國の壓迫に、立つに立たれぬ状態であつたから、最早や致方無く、運命を天に任せて、茲に宣戦の御詔勅を仰ぎ奉つたのである。

勿論日英同盟を御裁決在らせられたのも、日露戦争を御裁決在らせられたのも、皆な偏に明治天皇の聖明の效す所であつて、後世子孫皆なこれを銘記感激す可きものである。

第三十五 日本の發展と天佑

眞劍勝負の時

日本人が宣傳下手といふ事は、世界の公評である。我等は常に自らを過小視し、相手を過大視する癖がある。一口に云へば日本人には舞臺度胸が無い。其爲に道場で竹刀や木剣を以つて立合ふ際には、往々立後れの氣味がある。併し愈々眞劍勝負となれば、氣持が一變して来る。

日清戦役と果意外なる結果

即ち明治二十七八年戦役も、我等は清國の『鎮遠』、『定遠』の鋼鐵艦には、鮮からず心配をした。而して相手は日本與し易し、今が絶好の潮時と云つて我に挑みかゝつた。其の結果は寧ろ我等にとつても意

日露戦役と果意外なる結果

外であつた。

明治三十七八年戦役には、日英同盟といふ後楯があつて、後顧の心配は無かつたが、いざ露國と戦ふといふ事になつては、必らずしも勝算が我に在りと云ふ譯では無かつた。相討ちで済めば先づ上首尾であるといふ積りで、眼をつぶつて、清水の露臺より飛降りる覺悟で、戦闘は開始せられた。然るに其の結果は意外であつた。

大東亞戦争の大捷

即ち今回の大東亞戦争も、今日は漸く其の緒戦であるから、茲で其の結果を判断する事は出来ぬが、前二大戦に比較して更に豫想以上であつたといふことは、明言する事が出来る。

宣傳下手に感謝

我等は我等が宣傳下手であつた事を、必らずしも悲しまざるばかりで無く、寧ろ感謝する方が適當かも知れぬ。尠く共明治二十七八

我が條件通
過せば如何

年戦役に於いては、日本に駐在せる支那公使汪鳳藻やら、朝鮮の事に關係を有つてゐた袁世凱や、或は軍機大臣の翁同龢等に對して感謝す可く。又た明治三十七八年戦役に於いては、露帝の寵臣ベゾブラゾーフや、アレキセーフやクロバトキン將軍等に感謝す可きである。即ち今回の大東亞戦争に於いても、チャーチルや、ルーズヴェルトや、ハル等に感謝せねばならぬ。

若し清廷が日本の申す通りの事を聽いたならば、永久に支那の勢力を朝鮮より驅逐する事は出来なかつたであらう。若し露帝が桂内閣の條件を聽入れたならば、滿韓交換となつて、滿洲には日本は手も足も出す事は出来なかつたかも知れぬ。

米國が我案
に賛成せば
如何

荆棘より葡
萄を採る

即ち今回の大東亞戦争の如きも、若し野村、來栖の提出案に、ルーズヴェルトやハルが賛成したならば、到底アングロ・サクソン人を東亞より一掃する事は、百年の後を待つの外は無かつたかも知れぬ。日本に味方するのは、味方ばかりで無い。敵が日本に味方してゐる。日本に幸運を授くるのは、幸福の神ばかりで無い。不幸の神も亦た然りだ。即ち荆棘より葡萄を採り、濁水より牛乳を汲むは、我國の歴史に於いて、決して珍らしからぬ事である。若し世の中に天佑といふ事があれば、これ以上の天佑はあるまい。

第三十六 日露戦役と英國の所得

明治三十七八年戦役は、凡有る意味に於いて、世界の歴史に特筆大書せらる可き事件である。歐洲に於いて、例へばセバストポールの戦争に於いて、英佛の同盟軍は、露國の勢力の東歐及び南歐に及ぶ事を阻止したる事はある。然も露國東漸の勢力を目覺しく撃退したのは、實に明治三十七八年戦役である。これが爲に露國は一度手を著け、顔を出したる旅順、大連より撤退し、永久に渤海、黄海には、其の戦艦を浮ぶる事は出来なくなつた。

日露の戦争は、言つて見れば、日本對露國の戦争といふよりも、歐洲對アジアの戦争であつた。それ迄はアジア人は到底歐洲人には勝つ事が出来ぬものと、彼等自らも勝手に決めてゐた。又アジア人も彼等が決めた通りを、其儘承認してゐた。

然るに世界第一の強國である露國に對して、眇たる東亞の一小島國が立合つて、遂に勝を制したるは、恰もダビデがゴリアテを叩き付けたと同様であつた。此の如くにしてアジア十億の民族は、悉くとは云はぬが、其の最も聰明なる者は、早くもアジアの復興を夢見る事になつた。

而して此の事實は苟くも爲さんとすれば、必らず爲し得るものといふ確信を、アジア十億の諸民族に與へた。此事は誰よりも支那の革命者たる孫文が自ら之を言明し、彼の所謂大亞細亞主義は、實に茲に胚胎してゐる。

日本が樺太を漸く半分取り、東清鐵道を漸く長春まで取つたとい

一人前となつた日本

日露戦争と英國の利益

ふ事に就いて、輿論が不満を表したるは、是非も無きことである。併し大局より見れば、それよりも此の戦争は實に世界史上に劃期的運命を請來したものと云はねばならぬ。

世界史上に此通りであれば、我が皇國の史上に於いては、固より然りである。謂はゞ明治二十七八年戦役で、日本國は漸く半人前となつた。明治三十七八年戦役で、日本國は漸く一人前となつた。

扱て此の戦争の利益を受けたる者は、日本ばかりでは無い。日本は一所懸命に、所謂乾坤一擲の腹を決めて、此の仕事に取掛つたが、英國は別に何事も爲さず、全く手を袖にして其の利益を受けたのである。餅を搗くまでは日本が搗いたが、それを喫する點になれば、英國がより多く喫した乎、日本がより少く喫した乎、其の割前

英國の心配
取除かる

は双方の勘定に依つて相違があらうが、等しく其の利益を受けた事は英國と雖も、それを否定する事は出来ぬ。

英國の心配は、露國が支那を壓迫して、支那に在る英國の利益を蹂躪する事であつた。次には印度に向つて露國が其手を伸ばして、英國の立場を危険ならしむる事にあつた。然るに此の二つの心配は、日露の一戦に依つて、殆んど取り除かれた。悉くとは云はぬが、殆んど取除かれた。英國たるものは、全く仕合せ者である。

第三十七 幕末に於ける米國

ペルリ來航
の目的

話代つて茲に米國の事を語らねばならぬ。最早や今頃ペルリを日

本の恩人などと思ふ者は、一人もあるまいが、昨日までは殆んど斯く思つてゐた者が多かつた。米國は成可くならば日本を威嚇恫喝で開港せしめ、已むを得ずんば兵力を用ゆる積りであつた。又た小笠原島を取り、琉球を取り、臺灣の一部を取るといふ事も、彼等の計畫の中にはあつた。

併し日本が餘りに早く叩頭した爲に、無事に済んで、それが神奈川條約となり、やがては安政條約となつた。安政條約に就いては、明治五年、岩倉大使が條約改正の手始めとして歐米各國を巡遊し、^{*}ハリスに面會した時の話を傍で聽いてゐた田邊太一が、左の如く記してゐる。

當時井上、岩瀬の兩全權は、綿密に逐條の得失を密議し、爲めに

條約案は塗抹され、改竄され、完膚なきまでに至り、或は其の主意さへ移動せしめたことがあつた。かゝる事は當時日本の國勢及び人情に於て行ひ得ざる所なるべしと考へ、予も敢て抗論せず、殊俗異習の國民と交りを結ぶには、互に譲る所なかるべからざるは當然の理なりと思ひ、枉げて日本全權の意に従つた事も少くない。殊に輸出入物の税率については、予が持論たる自由貿易の本則に背き、日本の爲めに關稅の收益の多からんことを計り、二割平均の税を定め、物により重きは三割五分までの税を課せしめ、猶其上にも、日本有司の經驗の上には税率の改正をもなさしむべき餘地を残して、五年後に貿易の規約は再締すべき豫約をさへなしたるは、なほ其の率を高めて益々収益の多きを致さん心組なり

英佛の恫喝
に對する對
策を垂示す

しも、其の後國內不穩の爲め種々の故障を生じ、彌々改めて彌々薄く、竟に五分平均の税を課す（註、慶應二年英國の主唱による）に至りしと聞く。初め予の英佛使節が日本へ渡來の前に條約調印を促せしも、畢竟は彼等が清國戰勝の餘威に乗じ、日本を恫喝して清國の例を以て不利の條約を結ばんことを慮りしが爲で、輸出入物の税率と阿片禁輸とのことは實に其の要目であつたのである。然るに折角の用心も其の甲斐なく、僅に數年を出でずして税率も清國と一轍に歸するに至つたのは遺憾である。

元來米國は日本に於いて、第二流國の位置を占めてゐたが、常に英國に引廻されてゐた。

×

×

×

第三十八 米國の東洋進出

米國の東洋
進出

然るに其の米國が愈々手を東洋に伸べ出して來たのは、一八九八年八月（明治三十一年）ハワイを合併し、同年米西戰爭に依つて、スペインに取つて代り、フィリッピンに進出してからの事である。

米本土の擴
張

元來米國は今から百六十五年前には、十三州であつたのが、爾來盛んに其の土著のインディアンより土地を略奪し、又た佛蘭西をして一八〇二年にはルイジアナを賣らしめ、一八四六年には英國と葛藤の末、オレゴンを取り、一八四五年にはメキシコと戰つてテキサス及びカリフォルニアを取り、一八六七年にはロシアからアラスカ

を買つた。

此の如くにして漸次擴大し、今は四十八州となり、米國本土自身も、其の面積は七百八十四萬方呎弱、人口は一億二千三百餘萬、人口密度は一方呎に約十六人である。日本内地の人口密度一方呎に約二百人に比すれば、我に二十倍の面積を有する米國は、人口密度に於いては、我が十一分一にも満たぬ程である。

斯る國でありながら、尙ほ慊らず、其手を四方に伸ばし、遂に歐羅巴からの勢力干渉を拒否する爲のモンロー主義を擴張し、原案者が思ひも寄らぬ方にまで網を擴げ出した。而して今は南北アメリカを打つて一丸とするモンロー主義を、更に太平洋を越えて、東亞にまで及ぼさんとしてゐるのは、寔に奇怪千萬である。併しこれも

皆なアングロ・サクソン人の海賊根性の跳躍と見れば、別に不思議はあるまい。

米國は本來持てる國で、別に外に向つて手を出す必要が無かつたが、米國の帝國主義は、十九世紀の末期、マハン大佐が海權論を主張し、それに前大統領ルーズヴェルトや、上院議員のロツヂが參加して、當時英國に行はれたる帝國主義が、米國にも傳染し來つたのである。而して弟子の方が先生よりも却つて巧妙になり、遂に東亞まで乗出し來つた。

斯くて一八九九年、當時の國務長官ジョン・ヘイは、支那に對する門戶解放、機會均等論を以つて、東亞に於いて立後れたる米國の

世界の
大國と
なれる
米國

立場を、支那に向つて開拓せんとした。又た日露戦争の時には、ルーズヴェルト大統領が仲裁者の一役を買つて、遂にポーツマス條約が出で来ることになつた。

此の如くにして、米國は既に北米大陸に於ける一大雄國であるばかりでなく、世界の國として、何れの國に向つても、勝敗を争ふだけの地歩を占め來つた。

第三十九 獨逸皇帝とルーズヴェルト

獨逸皇帝と
ルーズヴェ
ルト

我等は此に世界史にも大なる關係を有ち、又た我國に最も關係を有つ、二人の人物を紹介する必要がある。一は獨逸皇帝ウイールヘ

二人の
黃禍
論者

ルム二世であり、他はテオドル・ルーズヴェルトである。此の二人は互に親友であつたが、又た親友である可く、共通の點も少く無かつた。

兩人共大々的帝國主義者であつた。獨逸皇帝は盛んに世界政策を唱へ、ルーズヴェルトは盛んに巨棒外交を實行した。而して兩人共日本人が勇敢であるといふ事には早く氣が付き、同時に黃禍論者であつた。何れが本家である乎、何れが分家である乎は、姑らく措いて、兩人共黃禍なるものに就いては、少からず心配した。

併し黃禍論は、兩人に限つた事では無く、英國のウルズリ將軍の如きも其の一人で、『支那は限り無き兵隊の產出國であり、日本は良き將校の產出國である。若し日本人が支那の兵を訓練して、西に向

他の
黃禍
論者

日清戦役と
カイセル

日露戦役と
ルーズヴェ
ルト

つて来れば、誰もそれに立向ふ事は出来まい』と云ふ説を吐いた事がある。

それは兎も角も、獨逸皇帝は日清戦役の當初は、日本人の勇敢なる事を、賞めちぎつてゐたが、何時の間にか三國干渉の發頭人では無いが、共謀者の主なる一人として、日本人の頭を押へ付けた。

ルーズヴェルトも日露戦争の時には、日本人の勇敢なる事を賞めちぎつてゐたが、やがては日本人が餘りに勇敢である爲に心配をし、其の結果が彼が調停役を買つた所以であらうと思ふ。

第四十 米國の排日と東亞への魔手

日米關係と
ハワイ

日本とアメリカとの關係は、至極無事であつた。アメリカは日本から最も多く生糸を買つた。而してアメリカから宣教師とか、其他學校の教師とか、書籍とか、凡有るものを日本に送り込んだ。而して日本の移民は、ハワイが未だ米國に合併せられざる以前から出掛け、今日ではハワイに於ける邦人は十五萬餘の人口を占め、ハワイの砂糖とか、コーヒーとか、其他の産物も日本人の手に依つて出来てゐる。加州に於いても同様であつて、加州の沙漠地をして、凡有る野菜や、又は花卉の類まで、日本人が栽培して、之を葡萄熟し、

加州に於ける
日本人の力

牛乳溢れ、百花爛漫の樂園としたのは、日本人の力である。

それにも拘らず、ハワイでは日本人排斥の運動が起り、やがては加州に於いて日本人を差別待遇する學童事件が起つた。遂には日本でも餘りに問題が面倒であるから、紳士協約で、此方から移住民を制限して、アメリカに移民を送らぬ事とした。

而してルーズヴェルトは、世界大戦後、日本人がアメリカに来て移民問題をやかましくする事を封ずる爲に、『日本人はアメリカ三界まで出掛けて來なくとも、日本は何故にアジア・モンロー主義を取つて、アジア大陸に出掛けぬか』と、日本人をけしかけた。アジア・モンロー主義といふ言葉は、日本人の發明では無く、ルーズヴェルトが日本人に教へた言葉である。

然るに日露戦争以後、アメリカの日本に對する態度は再變した。謂はゞハワイを併せ、フィリッピンを取つて以來、動もすれば日本を恐怖するの感に打たれたが、日露戦争以後は、自ら進んで日本人を押へ付けんことを以て、東亞に於ける主なる政策の一とした。

即ちハリマンがポーツマス條約の調印が未だ行はれざる以前に日本に來て、南滿鐵道を日米共同の仕事にせんと申込んだことを手始めに、或は南滿鐵道を世界列國の共同管理に置かんとするとか、或は南滿鐵道に對する平行線を作るとか、或は滿洲銀行を作つて、金融上より滿洲を支配せんとか、凡そ滿洲に向つて突貫したことが、六度あるとか云ふが、一々検査すれば、それどころではあるまい。

而して米人ストリートなる者が、滿洲で活躍した事は、なかく
惡辣を極めてゐた。しかのみならず、支那に向つても亦常に其の擁
護者となつて、頻りに日本と支那との間を離間中傷は愚か、成可く
喧嘩せしむる様に働いた。米國公使ラインシュユなどといふ者は、
全く米國公使としてよりも、寧ろ支那の顧問として日本人排斥に骨
折つた程である。

斯る次第であるから、日本と米國との關係が、圓滑である可き筈
は無かつたが、併し日本はアメリカに對しては、障らぬ神に祟無し
と思ひ、只管其の御機嫌を損せぬ様に努めた。即ちルーズヴェルト
が日本を威嚇する爲に、明治四十年に大艦隊を差向けた時、日本が
改めて之を招待したるが如きは、其の一例である。其爲如何なる瞋

拳も笑面を打つ能はなかつた。

第四十一 世界大戰と日本の骨折り損

斯くて世界大戰は出で來つた。日本は之に参加した。これは當初
に於いては、日本が自發的に参加したるばかりでなく、英國はいや
いやながらそれを承知した。併しやがては英國ばかりで無く、協商
國側は、何れも日本を驩迎し、是非歐洲までも出兵してくれと申込
んだ。併し日本はそれには應じなかつたが、日本の海軍は太平洋に
於ける、協商國側の大なる保障となり、日本海軍に依つて、英國と
植民地との間の交通は維持せられ、兵士の運送から、軍需品、糧食

日本若し獨
逸側に如何
たらば如何

まで、一に日本國の海軍の力に俟つところが多大であつた。日本の海軍は地中海まで出動して、其の任務を盡した。

若し假りに日本が獨逸側に與したとしたならば、香港も、シンガポールも、既に大正三、四年の頃はユエオン・ジャックで無く、我が旭旗が翻つたであらう。フィリッピンも亦た星條旗で無く、同様であつたらう。日本が獨逸側に與しなかつたのは、英國にとつても、米國にとつても、もつつけの仕合せであつた。

大戦後の英
米の態度

然るに愈々戦争が濟んで、平和會議となるや、英國は最早や日本には用は無いいふ様な顔をして、よそ／＼しく取扱ひ、ヴェルサイユ會議に於いて日本を虐めたのは、佛蘭西でもなく、伊太利でも

人種平等案
と日本の苦
杯

なく、全く英國と米國とであつた。佛を頼んで地獄に入るとは、此事である。

せめて日本も人間並みの取扱ひを受けようと思ひ、人種平等論を提出した際にも、英國は植民地の人氣を察して、それに反對した。大正八年四月十二日の聯盟規約委員會の表決では、日本、佛蘭西、伊太利、支那、セルヴィア、ルーマニア、チエツコ・スロヴァキア、ポルトガルの八ヶ國が賛成し、米國をはじめ、英國、ブラジル、ギリシャ、ポーランドの五ヶ國は反對し、賛成國が絶對多數であつた。然るに同委員會の議長であつた米國大統領のウイルソンは、人種平等案は、規約中に重要な修正であるから、全會一致でなければならぬと云ふ口實で横車を押した結果、遂に不成立に終つた。

カイセルの
夢遂に破る

英國の爲に
賣られた日
本

扱て日英同盟を周旋したる獨逸皇帝は、露國を東方に追ひやり、歐洲を安全ならしめんとしたが、却つてやがては獨露の戦争から、世界大戦となり、ホーヘンツォルレン家の帝位も王位も兩つながらこれを失ふばかりで無く、露國をも崩壊に至らしめた。

日本だけは幸に其の厄運を受けなかつたが、英國の番犬として、後生大事に勤めたる日本は、ヴェルサイユ會議に至つては、全く英國の爲に賣られたる姿であつた。固より英國は公然と日本を賣るといふ看板は出さなかつたが、事實は全く其通りであつた。

第四十二 日英同盟の廢棄と四國條約

日英同盟の
價值

第一回の日
英同盟は防
禦

我等は日英同盟を必らずしも日本が英國の爲に番犬の役目のみを勤めたとは思はない。日本も決して損をしたとは思はない。得たる所は双方五分々々と見て差支あるまい。英國も日本の力を假りて、最も怖ろしき露國を、アジアより追ひ拂ひ。又た日本の力を假りて英國の東洋に於ける位地を、堅固ならしめ。印度さへも其爲に安全ならしめた。世界大戦の時も其爲に最も得る所があつた事は、既記の通りだ。

極めて手短かに云へば、日英同盟は、當初は支那、朝鮮を限りとして、それが防禦同盟であつた。而して其の期限は五年であつた。それが即ち明治三十五年（西曆一九〇二年）一月三十日、ロンドンに於いて調印せられた。

然るに日露戦争の頃に至つてそれが改竄せられた。それは進んで
攻守同盟となり、支那、朝鮮より、更に東亞及び印度の地域に及ん
だ。而して十個年に延長せられた。これは日本にとつては、相當迷
惑なことであつたが、日本は當時日露戦争に於いて、日英同盟の甘
味を嘗めてゐる頃であつて、それ等の犠牲を拂つたのも餘儀無き事
であつた。それが明治三十八年（西曆一九〇五年）八月十二日調印
せられ、ポーツマス會議に於いて、日露條約の締結が出来た九月二
十七日に發表せられた。

然るに明治四十四年（西曆一九一一年）七月十三日、第三回の日
英同盟が調印せられた。これは七月十五日に公表せられたが、最も
眼目とする所は、其の第四條であつて、『兩締盟國の一方が第三國

と總括的仲裁裁判條約を締結したる場合には、本協約は該仲裁裁判
條約の有效に存続する限り、右第三國と交戦するの義務を、前記締
盟國に負はしむることなかるべし』との一項であつた。

これは當時英國が、米國と總括的仲裁裁判條約を締結しつゝあつ
たから、つまり日本と米國との戦争には、英國は日本を助くる義務
を負はぬといふことに外ならなかつた。これでは此の條約は、殆ん
ど骨抜きとなつたが、併し此の骨抜き條約でも、尙は無きに勝ると
して、これを日本では受け入れた。尤も此の第四條を考へ出したの
は、當時の外相小村侯であつたといふ事だ。小村侯も英國の感情を
顧慮し、斯る案を考へ出したものであらう。

四國條約と
日英同盟の
廢棄

何れにしても當時の英國は、一方では獨逸が盛んに英國に迫り來る状態であり、他方では米國の帝國主義が、愈々旺盛になりつゝあり、其爲に英國は米國に倚らんとする氣分が多くなつた。而して遂に世界大戰の後、華府會議の開催當初に於いて、所謂四國條約なるものが出来たり、日英同盟は抹殺せられた。

此の如く日英同盟は二十年繼續したが、初良く、中惡く、終は益々惡くなつて、遂に英國から邪魔物視せられ、英國は如何にして此の邪魔物を取除くかを考へ出した。而して四國條約といふ、一の方便を作り、太平洋に關係を有つ日英米佛は互に協調して行くといふ、殆んど譯も他愛もないものを以つて、之を葬り去つた。

要するに四國條約の目的は、唯だ日英同盟を餘りに日本の感情を

同盟を邪魔
物視せる英
國

四國條約の
眞の目的

華府會議と
英米の陰謀

害せずして、上手くこれを葬り去るだけの手段であつた。即ち其の第四條に『千九百十一年七月十三日、ロンドンに於て締結せられたる大不列顛國及日本國間の協約は、之と同時に終了するものとす』との文句の爲に、一切のことが出来上つたものと見て、差支あるまい。

第四十三 華府會議とロンドン會議

抑々華府會議は表面、軍縮會議といふ事であつたが、之は三國干渉以上の大苦杯を、英國と米國とが共謀して、日本に喫せしめたる一大陰謀であつた。此事に就いては、云ふ可きことが澤山あるが、

日本を大陸
より追ひ出
す

英國讀者の
嘆息

英國は多年の海軍に於ける二國主義を捨て、米國と同等に自らを引下げた。而して英、米、日を五・五・三の割合にする事に取決め、之にて先づ太平洋に於ける日本の海權を押へ付け、それから其の以前に四國條約を作つて、日英同盟を打切つた。更に其後に九國條約を作つて、日本のアジア大陸に於ける地理上、歴史上、人種上、凡有る點に於いて占む可きところの總てのものを剝奪して、日本を全く大陸より封じ込める事となつた。

此事に就いては、英國人でも、英國の取りたる政策が、極めて拙劣であつたことを『ナショナル・レビュー』などには、屢々論じてゐた。特に日英同盟放棄の如きは、之が爲に失ふ所は多くして、受ける所は何も無いといふことを論じた者があり、『英國も追々外交

『世界に於
ける英帝
國』書中の
一節

技師の世の中となつて、眞の外交家は跡を絶つ様になつた』と嘆息する者もあつた。

それは英國自身のことであるが、日本にとつては尙更のことであつた。即ち一九三七年、英國オックスフォード大學の出版部より刊行せられたる『世界に於ける英帝國』と題する書中に、

道徳的にも物質的にも、華府諸條約なるものは、凡そ二個の友邦が、一の第三國に對して、與へ得る限りの大打撃を、日本に與へたるものである。

と記してゐる。

然るに此の華府會議は、日本に於いては、第二の臥薪嘗膽の時代を請來したが、英國に於いては、却つて之が爲に英帝國分解の端緒

第二の臥薪
嘗膽

を開いたと云つても差支無い。これが爲に英國の海權は、米國と對立するまでに落下した。これが爲に英國は常に米國の鼻息を窺ひ、米國の下風に立つ事となつた。これが爲に英國は日本とは全く絶縁した。

更に日本にとつての苦杯は尙ほこれに止らず、ロンドン會議がいで來つた。ロンドン會議は、日本が主力艦に於いて、其の比率を英米兩國と等差を異にする爲に、せめて補助艦、潜水艇などにて、之を補はんとしたる、其の出口を押し入れられたるものにして、之が爲に日本は所謂六割國となつて來た。

六割國とは、彼等の十に對して、我は僅に六を保つ迄になつて來

たのである。即ち英米兩國は、日本の頭を押へ付くるばかりでなく、泥の上に額をすりつける程に日本を押し付けたのである。華府會議とロンドン會議とは、單に苦杯を日本に喫せしめたばかりでなく、日本内地に於ける人氣を險惡ならしめ、その爲に凡有る不祥事を見るに至りたる事は、今更これを茲に繰返す迄も無い。然も凡有る不幸を蒙りつゝも、其の結果が却つて今日を來したる事を見れば、日本は常に逆境に依つて、大なる賜物を受くるものとして、これを感謝せねばならぬ。

第四十四 國際聯盟退及歴史的因果律

アジアの光である可き日本は、不幸にして大正より昭和の初期にかけては、其光を失ひ。果は支那人にも侮られ、遂に満洲に於ける我が同胞は、何れもカパンを提げて、日本に歸るより外に道は無からんとする迄に形勢は押詰まつた。然も勢窮れば變じ、變ずれば通ずで、茲に所謂る昭和六年九月十八日の柳條溝の事件は出で來つた。而して種々の曲折を経て、儼然たる満洲の獨立國は、我が一體不可分國として、建設せらるゝに至つた。事の茲に至りたるも、畢竟するに英米の我に對する無理非道の措置が、我を驅つて茲に至らしめたるものである。

而して遂には國際聯盟の脱退となつた。此の國際聯盟の脱退なるものは、昭和八年三月、我國が初めてアングロ・サクソンの幕下よ

り獨立したる行動にして、我國の歴史のみならず、東亞の歴史にも、又た世界の歴史にも、特筆大書す可き出來事である。

日本は外國と相交る七十年、常に我國はアングロ・サクソンの尻馬に乗り、陰に陽に彼等を指導者として、それに追隨して來た。然も昭和八年三月、國際聯盟の脱退に於いて、初めて日本は國際上に於いて獨自の道を、横行濶歩する事が出來た。

凡そ歴史には因果律なるものがある。因果應報といふ事は、必らずしも曲亭馬琴の小説ばかりでない。歴史が正に其通りである。即ち三國干涉の發頭人であつた露國の朝廷が瓦解して、跡形も無く、其の共謀者である獨逸皇帝も、最後は慘めなものであつた。即ち日本

日本を裏切
りたる英國
の代償

を常に裏切りたる支那は、馬關條約以來五十年間、未だ一日も平和の日を見る事が無い。

特に英國に至つては因果觀面である。英國が日英同盟を裏切り、ヴェルサイユ會議に於いて日本を裏切り、華府會議に於いて裏切り、ロンドン會議に於いて裏切りたる其の代償は、頗る高値のものである。英國は世界に日の没する處の無き領土を有し、七つの海を支配してゐると云つてゐたが、今は事毎に米國に引摺られ、恰も米國の屬國同様の有様となつてゐる。

米國の奥の
手たる恫喝
政策

米國に至つては、ペルリが恫喝政策を以つて成功して以來、日本には恫喝一方で行けるものと決めてやつて來たが、實は米國は未だ

米國の誇大
妄想的帝國
主義

曾つて日本の手並みを知らなかつた。日本は只だ嚇しさへすれば、それで済むと思ひ、米國はそれを以つて日本に對する唯一の政策とした。併しこれは彼等としては、尤もの事であつたかも知れぬ。即ちペルリもこれで成功した。ルーズヴェルトが大艦隊を差向けて、又たこれで成功した。其の成功の例に倣つて、今回のルーズヴェルトも亦たそれで成功せんと試み、半ば成功しつゝあつた。

併し米國の帝國主義は、英國の帝國主義に比すれば、更に常識を超越してゐる。米國のそれは誇大妄想狂者の帝國主義であり、苟くも米國が指圖をすれば、世界の如何なる民族でも、皆な彼等の思ふ通りになると心得てゐる。其爲に遂に今日の狀態を惹起した。

第四十五 日本を賣つた英國の應報

英國の米國
依存

今日でも英國は唯だ米國を後生大事に頼みとし、其の首相が半年も経たぬ中に、二回までも米國に出掛けて、米國大統領と相談する様な始末である。憐れと言へばこれに過ぎたるものはあるまい。ところが英國が思ふ程、それ程米國は英國を思うてはゐない。謂はゞ英國は本家で、米國は分家である。分家は何時か本家の財産を横領しようと思つてゐたが、其の機會が無かつた。

然るに今度といふ今度は、其の好機が到來した。それで米國は英國を助くると云ふが、實は決して只で助くるでは無い。助くるだけ

米國の高利
貸根性と日
本の先手

古河に水多
し

のものは、現金勘定でこれを英國から取りつゝあるのだ。現金と云つても、金貨では無い。物である。斯る次第であるから、應ては香港もシンガポールも、乃至は英領海峽地、植民地、其他の島嶼も、米國の物となる可き運命であつたが、幸に日本が一足先きに手を著けたから、それが日本の手に渡る事になつたのだ。

併しながら英國は濠洲もある。加奈陀もある。南阿もある。其他印度もあれば、セイロンもある。エジプトもある。未だ英國の屬領は、所謂「古河に水多し」で、澤山ある。米國は英國を助くるといふ名義の下に、それ等の財産を横領せんとしてゐるのである。

英國の老記者ガウインの如きも、餘りにルーズヴェルトの態度が勘定づくであるから、「今少し血は水よりも濃やかなりといふ、本

英國の怨言
と米國の冷
淡

狼と道伴れ
となつた英
國

源に遡つて、親類らしき態度を以つて、此の危急に應じては如何』
などといふ怨言を吐いてゐる程だ。如何に怨言を吐いても、チャー
チルが二度は愚か、百度米國に赴いても、米國の態度は初から決つ
てゐる。米國は無代價で英國を助くるなどといふ存念は初から無い
筈である。

即ち英國は曾つて日本を米國に替へ、驢馬と道伴れしたの
が、麒麟に替へたと思つたが、それも束の間、英國は全く狼
と道伴れとなつてゐるのだ。笑止千萬とは此事である。

日英同盟廢
棄とヒュー
ズの反對

それにつけても、ヴェルサイユ會議の際には、率先して日本の提
案したる人種平等案に反對したる、當時の濠洲聯邦首相ヒューズ

日本の復讐
は必須

は、華府會議の際には、英國が日英同盟を廢棄せんとするに反對し
て、斯く云つてゐる。

英國は單に米國の故を以て、忠實なる同盟國を見放し、それを侮
蔑せんとするのであるか。さう云ふ行動は、却つて米國から輕蔑
されると同時に、日本は大に憤るであらう。我々は何事をも米
國から期待することは出来ない。そして傷つけられた日本は、必
らずや復讐せんとするであらう。

此の豫言は正しく二十餘年の今日に於いて、殆んど的中してゐ
る。而して濠洲も今は英本國の愈々頼む可からざるを見て、頻りに
米國の懷中に飛込みつゝある。

豫言的中

第四十六 米國の横暴と大東亞戦争の應報

米國世界制覇の手を伸

世界大戦以後は、英國の外交は獨自のものは殆んど無い。常に米國より壓迫せられ、米國より強引せられ、米國より引摺られて来た。而して米國は所謂汎米主義を以つて、南北アメリカを我が繩張り内に入れ、他の勢力を其外に驅逐し、排斥し去らんとするばかりでなく、滿洲の奥地までも、蒙古の邊疆までも、乃至はシベリアまでも、其の勢力を及ぼさんと試みた。それを利用したのが、即ち張學良や、蔣介石である。

米國の莫大なる軍事豫算

而して米國は大艦巨砲さへ造れば、戦はずしても日本は潛伏する

ハワイ海戦の大敗と査問會

ものと考へ、盛んに海軍を擴張して来た。即ち今日に於いても、米國の其の病氣は尙ほ癒えず、ルーズヴェルトは其の豫算に一ヶ年七百七十億弗の豫算を組み、これを邦貨に換算すれば、三千四百六十五億圓といふ、天文學的數字の豫算を以つて、我國を嚇殺せんとしつゝある。

而して彼は何の得る所があつたか、今頃になつて盛んに査問會を開き、太平洋艦隊司令長官キンメルや、ハワイ空軍司令官シヨートの如きは、職務怠慢の者として、それら審問を受け、議會では彼等を極刑に處す可しなどといふ激論を吐く者さへありと云ふ。併しこれはキンメルやシヨートばかりではない。陸軍參謀總長マーシャルや、海軍作戰部長スタークなどでも亦た同様であつて、要するに

日本と戦ふ
意志無し

彼等は初から日本を恫喝する爲に、大艦巨砲を拵へたるもので、日本と戦争する積りは、夢更無かつたのだ。全く無かつたとは云はぬが、其の必要を感じてゐなかつた。

日本の實力
を初めて知

併し今日彼等は既に其の實物教育を受けてゐる。若し彼等が日本の交譲したるところを、其儘呑み込んだならば、今日でもフィリッピンの所有者であり、ハワイの所有者であり、太平洋に於ける海權の尠く共五割以上の所有者であつたに相違無い。

日本の提携
策を嘲弄

然も彼等は日本が七重の膝を八重に折つて、提携を迫るも、昨年八月近衛首相が直接協商の爲に洋上にて出會せん事を促しても、却つてそれを新聞に於ける嘲弄の種子となして、眞面目に返事さへ

(御詔書) 朕ハ徳和ヲ復シテハ平同ム久リハリノ捷ノ解セシメテ以テ從ス
事トシテ我ニシテ増シメテ大ニ屈シテ上テ此延ノク爾被彌忍メニラ

米國の横車
起と日本の憤

呉れない程であつた。而して米國、英國、蔣介石、蘭印など、所謂A・B・C・Dの包圍陣を作つて蜘蛛が網を張つて蝶を締殺すが如き態度を執つた。而して彼等の頑迷不靈の結果、遂に我をして已むに已まねずして立つに至らしめたのだ。

彼等は昭和十四年七月、藪から棒に、通商條約斷絶を通告して以來、凡有る經濟的壓迫を試み、日本はそれで參るものと心得てゐた。日本が誠心誠意、交讓妥協の道を策するに際しては、愈々これで日本は參つて來たと思つてゐた。而して談判八ヶ月、凡有る横車を押し通した結果が、即ち昭和十六年十二月八日の大詔渙發となつた。而してそれ以來、未だ二ヶ月を出でずして、今日の狀態は如何である乎。世界地圖を改正せねばならぬ程ではない乎。天は自ら助く

恐る可き因果應報

る者を助く。天は必ずしも日本のみに幸するものではない。併し米國が己の力を料らず、物慾、權勢一方のみに氣をとられて、世界制覇の夢を見た結果は、忽ち此に大なる實物教育を受くるに至つたのである。因果應報も茲に至つて最早や説明の必要もあるまい。

第四十七 大東亞戦争と米英の徹底的驅逐

運命の手のまゝに

以上の物語を一讀する人は、大東亞戦争は何故に起つた乎。何故に起らねばならなかつた乎といふ事は、最早や能く諒解したであらう。日本は自ら好んだのでも無く、唯だ運命の手が米國を驅つて、日本を餘儀なく起たしめたのである。

英人の粘り強さ

戦争の前途は何人も豫言は出来まい。餘りに緒戦が華々しいから、後は容易く行くと思ふは、大なる心得違ひである。アングロ・サクソン人は、本來鈍重の人種である。粘り強さは彼等の特徴である。英人は何時も『戦争には唯だ一回の勝利がある。それは最後の勝利である』といふ事を云つてゐる。彼等は百回負けても、餘り屈托せぬだけの度胸を有つてゐる。

最後の勝を信する英人

今回も果して其通りである乎、否乎は知らぬが、夢油斷す可き事では無い。ペーター大帝が、スエーデンのカルル十二世と戦つて負け抜いたが、負くる毎に兵法を敵より學び、遂に彼の術を以つて彼に打勝つた。ウエリントンとナポレオンとの戦争も、辛抱強きウエリントンが、最後の勝を占めた。

堅忍不拔の
決心を持って

海賊の子孫
に妥協は
大禁物

禍根の芟除
と禍因の全
滅

華々しき勝利を得た事は、寔に皇國の爲に大慶至極であるが、これを徹底的に遣り付るには、我が將兵は云ふ迄もなく、總國民が腹帯を十重にも二十重にも締めて、堅忍不拔、砂を食つても、石に喰ひ付いても、これを完遂するといふだけの覺悟が必要である。

アングロ・サクソン人は、海賊の子孫であつて、海賊的本能に豊かである。従つて彼等は世界の何處にも、隙さへあれば膨張する自然の傾向を有つてゐる。そこで我が東亞より彼等を絶對的に一掃するだけの決心を以つてかゝらねばならぬ。大抵の所で妥協する時には、忽ち彼等が其の勢力を回復して來る事は、明白である。

芽を刈るには根から刈らねばならぬ。唯だ其の葉や幹を刈れば、明年は更に倍の力を以つて成長して來る。それで我等は禍根を芟除

し、禍因を全滅することを期せねばならぬ。

x

x

x

東亞民族の
迷信一掃策

戦ひ抜くの
外無し

東亞民族は、アングロ・サクソン人を優秀人種として、之を恐怖し、之を尊敬することは、殆んど迷信に幾きものがある。故にアングロ・サクソン人を東亞に残して置けば、東亞諸民族の迷信は、長く久しく留存して、到底東亞民族の解放などといふ事は出來ない。之を解放するの第一著は、アングロ・サクソン人を、東亞より放逐するより外に道は無い。

其爲には我等にとつては唯だ一心不亂に、戦ひ抜くの外はない。我等は如何に苦しくとも、始めたからには、其終を全うせねばならぬ。戦ひ抜くといふ事は、我等自身の責任であるばかりでなく、又

た我等百世子孫の爲にも、東亞の諸同胞に對する責任として然せねばならぬ。

我等は決してアングロ・サクソン人を憎むではない。併し彼等は實に蠶が桑の葉を食ふ如く、蝗が稻を食ふ如く、東亞を食ひ盡さねば止まぬ勢でやつて來てゐる。故に東亞の解放は、彼等を東亞より一掃するより外に手段は無い。

第四十八 大東亞の指導者としての三條件

我等は既に立つた以上は、最後まで其の目的を達成しなければならぬ。茲に我等の論據はある。日本には大東亞の光となり、應ては

世界の光となる可き運命が宿つてゐる。而して大東亞の光となるに就いては、我等は三個の條件を具備せねばならぬ。第一は前にも申した通り力である。即ち實力を以つて東亞よりアングロ・サクソンの勢力を一掃せねばならぬ。

有態に云へば、東亞の諸同胞は英米人を以つて、日本人よりも優秀人種と見做してゐる。英米を以つて日本國より雄大なる國と見做してゐる。故に我等は東亞の諸同胞に向つて、我が實力を示さねばならぬ。實物教育を示さねばならぬ。それは言葉の教育では無い。實際に於いて實物の教育であらねばならぬ。即ちアングロ・サクソン人を一掃し、彼等をして東亞より跡を絶たしむる迄に、彼等を撃滅せねばならぬ。斯くして初めて我が大東亞の諸同胞も、我等を指